



さくら / さく



ら

水月帽子屋

## SAKURA、登場

---

今週のヒット・チャート一位は、前評判通り**SAKURA**が奪取した。佐倉和磨と高良桜太によるこのデュオは、今、人気絶頂を迎えている。事務所の後輩からも「佐倉ちゃん」と呼び親しまれている童顔、佐倉和磨の天性の歌声と圧倒的なダンス・パフォーマンスで、ファンでなくとも高良「王子」と呼んでしまう美形のヒット・メーカー高良桜太の楽曲を次々に送り出す**SAKURA**は、アイドル専門と言われていたセゾン・プロダクションが脱アイドル宣言の下に売り出したコンビだったが、デビューから五年経った今、結局彼らはアイドル誌の表紙を飾っていた。

この、作品を発表する度に音楽業界に記録を刻むモンスター・デュオは、アイドルなのか、ミュージシャンなのか。テレビ出演が歌番組に限られている彼らは、ミステリアスな存在として注目されていた。

ばりばり。

「ねえ、オータ。おでたじ、むぶて・・・」

口一杯に煎餅を頬張って、啜った煎餅の端っこでテレビ雑誌を指しているのは佐倉和磨。少しふっくらとした頬のラインとオレンジに染めたふわふわとした髪が、童顔をさらに幼く見せている。大きめのTシャツに七分丈のジーンズというラフなスタイル。女性のように細い首にはくっきりと喉仏が浮かんでいて、発声にあわせて驚くほどよく動く。口の端からチラチラと覗く八重歯には煎餅の欠片が付いている。四本の犬歯全てが八重歯というのは、全国の八重歯人口の中でも珍しい部類ではないだろうか。くるんとした大きな目は、大きさはばかりが目立つのでわかりづらいが、じっくり観察するとややたれ目気味だ。その黒目がちな瞳は、雑誌から全く動かない。特集タイトルは、『ミステリアス・デュオ、**SAKURA**、二枚同時トップ10入り！』。

「食うか喋るかどっちかにしてくれ、かず。」

佐倉和磨を「佐倉ちゃん」ではなく「かず」と呼ぶのは相方の高良桜太と、家族だけ。選択を迫られた和磨の答えは・・・ばりばりばり。

「食う方選んだのか、さすが佐倉ちゃん。」

「河原さん、そこ感心するところじゃないでしょう。かずの煎餅好きは今に始まったことじゃないし——差し入れに持ってきたら際限なく喰うって、分かってたはずでしょう。」

河原京輔。セゾン・プロダクションの研修生から、デビューの話を蹴ってプロダクション・スタッフとして就職した変わり種。今やトップアイドル、**Paradise Call**を手掛けるやり手であり、**SAKURA**の経理処理窓口を任されている。

「王子は今日もクール・ビューティーか。いいね、キャラが立ってきたなあ。」

すっきりとした黒髪と、切れ長な目。神経質そうな細い顎。きゅっと小さな顔は凛々しく整った美形なのに、対峙すると顔よりも手に視線を奪われる。贅肉のない大きな掌に長い指。五指を広げたら、本人の顔が二つは入りそうに見える。高良桜太は、細身のスーツに糊の利いたシャツという、和磨とは対照的なスタイルだ。緩められたネクタイに、王子の楽屋というよりエリートサラリーマンの休憩時間を盗み見しているような気分させられる。

「キャラって何です？俺、言われるほどクールじゃないですよ。かすが、言われているよりガキなだけで。」

「それがマイク持った途端、あの濡れた歌声で圧倒的な声量だもんなあ、敵わないよなあ。」

「研修生だったころから、かすは特別です。敵おうなんて、誰も思いませんよ。で、話って何です？河原さん、わざわざかずに餌与えにきたわけじゃないですよ。」

「ああ。そのことなんだけど。仕事の幅、そろそろ広げないか？」

「また、その件ですか。もう妥協路線はうんざりです。今更アイドルとして活動しろとでも？SAKURAは脱アイドルじゃなかったんですか？少し曲が売れたからって、方向性を変えろと？」

「そんなこと言って。アイドル誌の表紙、もう8か月連続で飾ってるじゃないか。」

「あれは広報戦略です。所属事務所の特性上、俺らの曲の購買層があの雑誌の購買層とある程度重なることは否定できない。」

「真面目にアイドルやってる後輩たちには聞かせられないセリフだな。」

「俺、正直、あの雑誌は研修生の頃から苦手なんです。パフォーマンスにも曲作りにも関係ない質問が多いし、着せ替え人形扱いで写真を撮られるし、揚句変なあだ名まで付けられて、お蔭で今やどこへ行っても王子、王子って・・・迷惑千万だ。」

「アイドル事務所で雇われてるんだから、当然の仕事だろ。あの雑誌とうちの事務所は二人三脚でやってきたんだ、サービスしておけよ、可愛い後輩たちのためにも。」

「オータ、見てみて、この雑誌！俺たち、ミステリアスだって。」

「もう全部食ったのか、少しは自重しろよ。後で喉渴くぞ。」

「もう渴いたあ。」

「そこ、緑茶あったぞ。」

「なんというか、爺やみたいだな、天下の高良王子が。」

「実際、世話係みたいなもんです。SAKURAにはマネージャーはつけない、自分たちで管理しろって言ったの、河原さんと社長でしょう？実験的なグループだから経費はかけられないなんて言ってたけど、結局かすの面倒を俺に押し付けただけにしか思えませんね。あの実力だ、アイドルでデビューしたって一流になれたのに、少し扱い難いからって経費もないところに寄越すなんてとんでもない話ですよ。俺は今でも、かすを俺の音楽に縛っておくのは勿体ないと思っています。あの声は、本物ですよ。俺の歌だけじゃなく、他にも色々な音楽に挑戦させたい。かすには可能性がまだまだ眠ってる。」

「だから、ニューシングルのカップリング、懐メロのカヴァーにしたわけか。」

「最近、俺らにも固定イメージ付いてきたみたいなんで、かすのイメージには似合う曲かと思ったんです。新しい声、出してたでしょう。かすの声がああ表情を出すまで、アレンジを何種類も試したんで、結構意欲作なんです、あれ。」

「俺も社長も、王子を佐倉ちゃんのマネージャーとして抜擢したつもりはないよ。そもそも、SAKURAは王子ありきの企画だ。王子がいなきゃ、作詞作曲からアレンジまで自分たちで手掛けた曲でデビューするなんて実験ユニット、うちじゃ出来なかったよ。それにあのカップリング

曲は、アレンジの勝利だ。佐倉ちゃんの声も、原曲も、深いところで理解して、全く新しい音楽になってる。タイトル曲も良かったよ。今度の曲は攻めてきたね。二人のメロディーラインが交錯するところもデュオならではの面白かったし、のっけからの佐倉ちゃんのフェイクもかなりパンチ効いてた。」

「前のシングルがかなり爽やかだったんで、トップテンに残っている間に毛色の違う曲をぶつけてみたら面白いかと思って。本当は桐沢監督の映画用に書いていた曲だったんですが、ラッシュ見せて貰ったら、なんかこう・・・しっくりこなくて。」

「で、自分たちのシングルに使ってしまったと。まあ、タイアップなしで一位獲ってくれて有難いけど、映画の曲は大丈夫なのか。」

「今作ってます。イメージとしては、音遊びの要素を無くして、もっとロック寄りにシフトして、ちょっとソリッドな感じで。サビのメロディーラインは出来てるんですが、詞がどうもハマらなくて。」

「締切、大丈夫なのか？まあ、クライアントさえ納得すれば、事務所側からはSAKURAの音楽性には文句はつけないよ。仕事に関しては、王子に全権。付随してきた経理処理は俺。このスタンスは崩さないから、まだまだ王子に楽はさせない。でも、そうすると今回の曲よりもっとハードになるのか。」

「多分、かずが踊り狂ってくれますよ。」

「なに、俺、狂うの？」

「王子が佐倉ちゃんに出す難しい宿題考えてるってさ。」

「えーっ、やだ。オータ怖い。こないだ夏のなんとかの振付考えてやっとな歌詞も覚えたばかりなのに、今日やる曲はもう違うんだよ。俺もうわけわかんないよお。」

「『Summertime's Lover』な。」

「佐倉ちゃん、今日どんな曲やるの？」

「んと、『マジックハウス』。」

「真顔で言うなよ、タイトルコールまでに覚えろ、『マジックミラー』だ。っていうか笑いすぎですよ、知ってるんだったらコイツに訊かないで下さい。」

「いいねえ、佐倉ちゃん。やっぱり面白い。この仕事、俄然受けて欲しくなってきた。」

「そもそも、河原さんのところに話が来ること自体が怪しいんです。SAKURAの営業もスケジュール管理も俺が一人でやってきたのに、なんで俺のところにオファーして来ないんです？一体何の仕事なんですか？」

「多分、高良王子なら説明も聞かずに断ると思って俺経由にしたんじゃないのかな。内容は悪くない。真面目なクイズ番組だよ。」

「クイズですか。かずを、解答者席に座らせろって言うんですか？」

「面白いと思うよ。」

「オータはクイズ得意だもんね。いっつも観てるもん、世界を旅するクイズの番組。ほら、なんとかやってやつ。」

「河原さん、俺たち、ミステリアスな二人組として特集されたばかりなんです。」

「ミステリアスな二人と極上のミステリー、いいじゃないか。」

「キャッチコピーだけ完璧でも、内容が伴わなければ意味はないでしょう？俺たち二人が長くトークしたら、ミステリアスのミの字もないことが世間に露呈されます。」

「そう、それ。ミステリーなクイズ。オータ大好きなの。毎週録画してるんだから。」

「へえ、王子はクイズ好きなのか。なら好都合じゃないか。王子がクイズで惨敗するようなら事務所としてもちよっと渋るところだが、要は佐倉ちゃんが盛り上げて王子が締めてくれればいい。ライブのMCと要領は一緒だよ。ちよっとお馬鹿なところが可愛い佐倉ちゃん、インテリな王子、いいコンビネーションの構図じゃないか。」

「可愛いなんて言っているのは、河原さんがマネージャーじゃないからです。」

「王子だってマネージャーじゃないだろう。うちのドル箱音楽プロデューサーじゃないか。」

「俺を褒めても、かずの頭につける薬は手に入りませんよ。」

「つれないなあ。実はね、今回の話のスゴイところは、ゲスト解答者じゃないってところなんだ。新レギュラーだよ、ご長寿番組の。しかも、エンディング曲も頼みたいそう。ファミリー層に長年愛されている番組だし、うちの事務所から大真面目なインテリ・バラエティーにレギュラー出演するのはかつてない。高嶺の花のSAKURAを、高級感残しつつお茶の間の人気者に出来るまたとないチャンスだと思うけどな。」

「却下、ですね。プロデューサーとしては、高嶺の花路線、崩したくないんで。」

「佐倉ちゃん、高良王子に何とか言ってやってくれよ。」

「んーとね、オータはね、クイズ好きだけど、録画までしてるのはクイズが見たいからじゃないんだ。だから駄目かも。あのね、オータはもうほんっとおに昔っから夏川遠子の大大大ファンなの。研修所でもかなり有名だったよ？レッスンの合間にモノクロの映画見てる奴が居るって・・・噂聞いてない？でも、もうかなりお婆ちゃんだから、今はあんまり御芝居の機会がないでしょ。だから、毎週クイズの番組に出てるの楽しみなんだよね、オータは。」

「余計なこと言うな。それに、お婆ちゃん言うな！彼女は俺の理想の女性だ。」

「え、夏川遠子が好きなの？しかも、女優としてじゃなくて、女性として見てるの、王子？」

「トークしてるとことかテレビでやってると、オータいっつも言ってるもん、『そんなことそこで言っちゃうんだ、可愛いなあこの人』って。ホント好きだよなあ。」

「お、王子、まさかのババ専宣言・・・」

「誰がババ専ですか。」

「だって夏川遠子だろ？熟女どころか、王子の御祖母さんより年上じゃ・・・」

「死んだ祖母さんの方が一個下ですが、何か。」

「いや、自由だよ、価値観は。でも、王子が、ババ専・・・」

「だからババ専じゃないって言うてるでしょうが。夏川遠子は、特別な女優ですよ。観てないでしょう、『砦の花嫁』。日本映画史上に燦然と輝く名演技ですよ。テレビシリーズの『美少女探偵トオコ』は観ましたか。可憐かつ絶妙な視線の演技をするんです。」

「『美少女探偵トオコ』って、テレビがカラーになる前のやつじゃないか。」

「子役主演のテレビシリーズとしては傑作の一つです。」

「いや、まあ、でも・・・それなら、王子はこのオファー、受ける気になるよ、絶対だ。」

「今、話題を適当に切り上げようと思いましたね。ダメですよ、夏川遠子についてなら俺、二十四時間テレビの放送枠全編もらっても語りつくせないくらいなんですから。」

「いや、だから、王子。オファーが来てるクイズ番組、『ワールド・ミステリー・ショウ』なんだよ。」

「あー、それだよ、それ。オータが録画してる、ミステリーなんか。」

「え、『ワールド・ミステリー・ショウ』ですか？」

「そう。看板レギュラー解答者は、番組開始当初から夏川遠子。勿論、今回の改編でも、大女優の看板は健在だ。たしか、アメリカ人のギタリストがレギュラーだったろう？彼が日本での活動を休止して帰国するんで、空いた枠にSAKURAをと先方は言ってる。つまりは一応ミュージシャン枠ってことだ。ご長寿番組だけど、最近はファンも固定されて視聴率も伸び悩んでる

。SAKURAがレギュラーなら、一気に新風を吹き込めるって期待されてるんだ。お互い、新しい枠組みを試してもいい頃だという提案だ。事務所的には面白い試みだと思っているし、王子にとっても美味しい話じゃないのか？若者向けの音楽番組にいくら出たって、夏川遠子とは廊下ですれ違うチャンスさえない。それが一気に、同じ番組のレギュラー同士だ。楽屋に挨拶に行っ、サインを貰え。もしかしたら、お茶飲み友達になってくれるかもしれないよ。」

「まさか、あの女優が、俺とお茶なんてしないでしょ・・・でも、サイン、欲しいな。レアなんです、もう十年くらい封印してるっていうし。」

「じゃあ、決まりだね、王子。佐倉ちゃんもいいね？」

「俺は、オータの恋路を応援するう。」

「佐倉ちゃん、応援はファンの皆にバレないようにしようね。まあ、若いモデルとかとスキャンダルになるよりずっと安心か・・・王子、ナイスチョイス！去年、グラビアアイドルに追っかけまわされてた時は冷や冷やしたけど、靡くわけもなかったか。」

「だからあの時も言ったでしょ、脳味噌より胸の方が重いような女は願い下げだと。」

「確かに、夏川遠子の胸はもうしぼんでるよな。」

「頭良いしね、あのお婆ちゃん。クイズいっつも正解してるもん。それに、トライリングル女優って雑誌に載ってたよ。多分トラ飼ってるんだよ、オータだって飼いならせちゃうよ。猛獣使いなんだよ。」

「二人揃って、なんで態々俺の前で夏川遠子を侮辱するんだ。それに俺は別に巨乳が嫌いだとは言っていません！知性を感じない女は口説く気になれないだけです！来るものは拒みませんよ、俺。それから、かず、トライリングルはトラの飼い主って意味じゃないぞ。」

「じゃあ、ライオンの飼い主ってこと？」

「トラどこ行った？飼い主路線から離れろ。」

「拒んでもらわないと困るな、うちの事務所、スキャンダルはご法度だよ？いやしかし、天下の高良王子が、俺様王子様高良様が、ババ専・・・」

「違うって言ってるでしょうが。」



いやあ、はじめまして。僕、青井充明と申します。この話、僕がストーリーテラーで、僕の一人称で話を進めるって聞いてたのに、なんで僕の自己紹介がSAKURAの楽屋ト  
ークの後なんでしょうね。納得いかないなあ。

改めまして。青井充明、三十二歳。大女優・夏川遠子のマネージャーを勤めて三年目。大女優といっても、女優としての仕事はここ二年全く入っていません。もう高齢ですし、テレビの草創期から子役を始め、カラーになった頃には人気女優、バブル期にはトーク番組でひっぱりだことなり、イメージに手垢が付きまくっているのは否定できませんね。今じゃレギュラーはクイズのみ、トークの特番を年に四回、後は月一ペースでバラエティーにゲスト出演のオファーがあります。大看板なのでこちらからガツガツ売り込みに行くわけにもいかず、頭が痛いところです。売れっ子女優じゃないのでスケジュール管理は簡単ですが、雑学王な割に一般常識に欠ける元祖子役上がりの大女優のプライベートの御供をさせられるので、拘束時間は売出し中のアイドルのマネージャー並みに長いです。

夏川遠子、ですか？事務所を上げてかしづいていますので、感覚が多分、女王陛下なんですよ。別に性格が悪いとか、そういうことはありません。ただ、何かを誰かにやってもらうということが当たり前のことになりすぎていて、きっと一人では生活できない人になってしまっていると思います。でも、そうしたのって、うちの事務所なんですよ、複雑です。結構、振り回されるんですよ。だからあの歳まで未婚なんでしょうね。もう結婚は無理でしょうけれど。本人の夢は「花嫁」らしいですが。せめてあと半世紀早ければなんとかなったかもしれませんが、あの歳で「理想の王子様」像を語られても笑って聞き流すしかありませんね。まあ、可愛らしい方ですよ。可愛らしい御祖母さんです。女性は幾つになっても女性なんだと思ひ知らせてくれます。

「アオくん、アメリカさんの代わりにご一緒することになった方ってどういう方？」

夏川遠子がトークで人気を博したのは理由があります。トークの相手がどういった経歴を持ち、どういったところを強みや弱みとしているのか、キチンと把握してから相手に対するので、思いもかけない深い話になったり、視聴者の皆様が思いもよらない新しい一面が見られたりするんですよ。仕事に対して下準備を忘れない、真面目な方です。共演者のことも、どんなに今まで接点のない相手でも最低限の情報は持つてから撮影に臨まないと気が済まないタイプ。どんな下っ端相手でも失礼が無いようにと気を配るところは本当に素晴らしいと思いますが・・・話している途中でヒートアップして結局失礼なことをやってしまうこともあります。お調子者というか、自分に正直と言うか、夏川遠子節というか。

「SAKURAという名前の二人組です。」

「桜？まあ、風流なのねえ。伝統芸能の方かしら？」

やっぱり。まさかとは思いましたが、やっぱりご存じ無い・・・去年一番稼いだアイドル・ミュージシャンを。

「今一番若者に人気のあるミュージシャンです。セゾン・プロの。」



「ああ、アイドルの子供たちね。」

おお、出た、子供たち扱い。本人に悪気がないところが、この人の困ったところですよ。

「まあ、簡単に言えばそうです。ただ、セゾン・プロで唯一、アイドル・デビューしていないグループなんです。だから、アイドルの方がアイドルであることにプライドを持っているように、SAKURAの二人はアイドルではないことにプライドを持っていると言われてます。」

「そうなの。じゃあ、アイドルさんって呼んだらお気を損ねてしまうわね。大事なことを教えてくれて有難う。」

にこりと笑うと、さすが女優、やはり幾つになっても女性は綺麗でいようと思えばいられるんだと思わせてくれます。確かに皺も沢山あるけど、この人、もうここ十年くらい全く歳をとっていないんですよ。時を止めてしまったかのような。いや、その分努力もしてるんでしょうけど。でもまあ、ここまでくると化け物だよなあ。

「お二人とも、やっぱり男の子？」

そうきたか。確かにセゾンは男性アイドルの宝庫だから。

「ええ。ヴォーカルと振付を担当しているのが、佐倉和磨さん。研修生の頃からずっと、オレンジに染めた髪がトレードマークですね。基本的には、誰からも佐倉ちゃんと呼ばれているようです。セゾンの中では突出して歌が上手いですね。ベテランのミュージシャンからも一目置かれているようです。あのフォークの神様、畑野昌親が『あの声には、嫉妬さえ届かない』と評したとか・・・」

「畑野君が？あの子、そんな偉そうなこと言うの？確かに作曲の才能はあるけれど、あの子、歌はお粗末よ？」

音楽界の大重鎮に、そんなダメ出し出来るのは遠子さんくらいです。

「ダンスも上手なようですね。デビュー前にはダンサーとしてプロへの転向の話もあったようです。それから、作詞・作曲を手掛けているのが高良桜太さんで、」

「あら、自分たちで音楽も作っているの？」

「デビュー曲から今までずっと、高良桜太の作った曲で勝負していますね。最近では往年の名曲に高良桜太が大幅に手を入れたアレンジも出していますが・・・ところが、アイドルとして売ってはいない、とセゾンが言い切るところで・・・それで高良桜太ですが、ステージ上では基本的にコーラスです。二人とも勿論セゾンのアイドル養成所上がりですから、曲自体は踊りながら歌うパフォーマンス・スタイルですね。公式プロフィールによると佐倉さんが、」

「佐倉ちゃん、ね？」

ああ、本当になんて呑み込みの早い老女だ。って、わー、今の発言取り消して下さい。大女優に対して不適切な発言でした。

「はい。佐倉ちゃん、さんが無類の煎餅好きだそうです。それから、年下だと思われがちですが、佐倉さんの方が王子より二つ上になりますね。」

「王子？」

「ああ、すみません。高良桜太さんはファンの方々から高良王子と呼ばれているそうで、最近では王子というのが高良さんの愛称のようになっています。」

「あらまあ、王子様がいらっしゃるの。」

孫の自慢をする友人を眺めるような微笑ましげな顔で、僕を見るのはやめてください。高良桜太を王子と呼んでいるのは、別に僕が彼のファンだというわけではなくて、皆がそう呼ぶからで・・・いや、SAKURAの曲は好きですよ、今までリリースされたアルバムは全部持っています。けれどファンかと言われると・・・女の子じゃあるまいし・・・でも、ホント良い曲出しますよ。新曲の『マジックミラー』も、買ってしまいました。効果音が色んなところに挿入されていて、ちょっと癖のある曲なんですけど、リズムがホント良くて・・・あと、詞！歌詞がラップばりに全部韻を踏んでるんですよ。遊び心を感じるというか、その癖のあるところがクセになるというか・・・いかん、気を取り直そう。

「王子様がいる、というより、そういう愛称の若者がいる、という感じです。彼らのファンでなくとも、今や皆そう呼んでいますから。」

「あら、王子様じゃないの。残念ね。」

がっかりしなくても、もともと貴方の白馬の王子ではありませんよ。

「大手事務所に所属していながら、インディーズレーベルから出発した異色のデュオです。インディーズの売上枚数歴代一位を記録して、満を持して独自のレーベルを立ち上げてからのデビューでしたので、デビューの年には話題性もあって新人賞を総なめにしましたが、メディアへの露出が極端に少なく、二年目は曲は売れたものの、どんな顔だったかアーティストイメージが浮かばないなんて言われていましたね。それでも若い世代からは圧倒的な支持を得ていましたが、三年目から歌番組への出演を増やしたり、インタビューに積極的に応えたりとSAKURAそのものを知ってもらおうというシフト転換をしてきた印象があります。その戦略が功を奏して人気が幅広い年齢層へと広がり、四年目の去年は音楽業界の全てのセールスで一位をとっています。——シングル、アルバム、ダウンロード、音楽DVD、四冠ですよ！文句なしに今一番売れている歌手です。今年が五年目で、既にシングルを3枚出しています。勿論、3枚とも好調です。」

「まあ、売れっ子さんなのね。」

鷹揚としていらっしゃる・・・流石大女優。飛ぶ鳥を落とす勢いのSAKURAも、彼女にかかればハナタレ小僧。

「で、SAKURAは売れっ子ですが、セゾンの中では異色の存在と言うこともあり、出演の交渉もスケジュールの管理も全て高良さんが行っているようですね。専属スタッフがいないのが露出の少ない原因かも知れませんが、高良さん本人があまり音楽番組以外には熱心でないようです。それなのに、今回はクイズ番組のレギュラーでしょう？かなり世間的にも注目度の高いキャスティングになっていると思います。」

「まあ、王子なのに執事さんみたいなのね。執事王子って呼んでみてもいいかしら？」

ああ、結構頑張って説明したのに、遠子さんの頭に残ったのはそこだけか・・・夏川遠子節、嫌いじゃないですけど、たまにグツタリします。

緊張、なんで僕がするかなあ。正直、仕事柄、大御所の方々にはよくお会いするんです。気は遣いますけど、年代的にそれほどグッとこないというか・・・いや、申し訳ありません。遠子さんには告げ口しないで下さい。でも、今現在第一線の売れっ子とご一緒する機会なんて、ホント無いんです。それが、今、見てください！僕の目の前に**SAKURA**が！ミーハーだと思われるかもしれませんが、僕はね、カラオケの持ち歌にしてるんです、**SAKURA**が新人賞を獲った『**Lunatic Es**』。**SAKURA**のメジャー二枚目のシングルですね（アイドル事務所からのデビューなのに、最初はインディーズでプロトタイプ盤を出してるんですよ。限定千枚。その後、インディーズで一年近く潜伏。三枚ほど毛色の違う尖ったミニアルバムを出してからメジャーデビューは、予想を裏切る、王道のキャッチーなCMソングでした）。切ないながらちょっと狂気がかった歌詞と、Aメロの繊細なメロディーラインが大サビでガツンと激しく転調するところが見事にマッチしていて、いい曲なんですホント。サイコ・サスペンス映画の主題歌だったんですけど、エンドロールでこの曲が流れた瞬間、それまで二時間ものあいだ悪者にしか見えなかったサイコ野郎が愛に狂った可哀想な男に見えて、映画館を後にする時には少し爽やかな気分になったものです。しかも、ヴォーカルが良いんですよ。確かに上手いけれど所詮アイドル事務所の歌手だろう、生歌には耐えられないんじゃないか、なんてタカを括っていたことを土下座で謝りたくなるほどの歌唱力で、正直、鳥肌が立ちました。生放送のオーラなんて、半端じゃないですからね。ファンが多いのも納得です。で、ですよ！その**SAKURA**が、楽屋に挨拶に来ているんです。ああ、御婆さんなんて心の中で思っていて御免なさい。大看板のマネージャーやっててホント良かった。ああ、緊張する。

「お早うございます。初めてお目にかかります、セゾン・プロダクション所属の高良桜太と申します。」

高良王子、やっぱりマネージャーみたいな仕事ぶりなんだ。なんだか新鮮だ。

「こちらが佐倉和磨。」

紹介されなくとも、分かっています。扉が開いた瞬間に目が吸い寄せられましたから。一瞬で視線をさらう、華やかな存在感。これぞ、オーラ。それも、お手本みたいなアイドル・オーラです。もうちょっと背が低いかと思っていたのに、実際見ると僕より背が高いんだな、佐倉さんって。そうか、より高い王子といつも同じ画面で見ているからか。

「二人で、**SAKURA**というユニットを組んで音楽活動をしております。本日から同じ番組でお世話になります。ご一緒させて頂けて光栄です。」

ソツないな。可愛げもないけど。スーツが似合うし、色男だし、いかにもイイオトコ過ぎて周りの男の劣等感を刺激するタイプだな、王子。こんなイケメン商社マンみたいな人が、どうやったらあんな曲を生み出すんだろう？

「俺も、嬉しいです。」

舌つたらずな発音の割に、はきはきとした喋り。流石セゾンの研修生上がりと言うべきか、マスコットの万人受けする可愛らしさは、とても成人男性とは思えません・・・

「でも、オータはもっとずっと喜んでます。」

キラキラとしたアイドル・スマイルは、どうやら天性のものみたいですね。これほどの逸材はセ

ゾンにだってそうそう居ないだろうに、アイドルとしてではなく歌手として売り出すなんて、勿体ないというか、冒険したというか・・・でも、それで彼らは結果残してるからなあ。

「余計なことを言うな。」

小声で注意する。勿体ないと言えば、彼だってそうですよ。シンガーソングライターとしてデビューしていれば、このSAKURAブームは彼一人のものだったはず。歌だって上手いし、ダンスも上手い。そもそも、SAKURAの曲って振付が無かったとしても成立すると思いますよ？でも、あのダンスもカッコイイからなあ・・・

「佐倉ちゃんと執事の王子様ね？今、お若い方にとっても人気なんですってね。」

執事の王子って、言い回しとして斬新過ぎませんか、遠子さん・・・

「いえ、我々などはまだまだです。」

王子は静かに微笑む。SAKURAって二人とも顔小さいなあ。手足も長いし。それに、王子の皮膚ときたら！PVで観た時もシリコンのように滑らかだと思っていたけれど、実際に見るとちょっと薄ら寒いですね。佐倉さんの肌も綺麗ですが、人間の肌として綺麗なんです。柔らかそうだし、すべすべしていそうだし。王子は違います。あまりにも肌が綺麗すぎて、アンドロイドみたいだ。首なんて、ツルツルでしょ、あれ、どう見ても。作り物みたいで、体温なんて無さそうです。

「夏川さんだって、お若いオータさんに人気です。」

「・・・かず！」

なんというか、音楽番組でもフリートークが漫才みたいだなんて言われていたけれど、自由な佐倉さんと、手綱を握っているようでいて振り回されている高良さんという構図なんだな、この二人って。夏川遠子と僕の関係を見るようです。高良さん、御苦労されていますよね、わかります。

「黙らないもん。俺、オータの応援団長するんだから。」

「かず！いいから！」

「オータさんっていう方もいらっしゃるの？」

「オータは、オータです。」

ピシッと傍らの高良さんを指す。この人、自分が頭の中で考えていたことを脈絡なくポンッと提示してしまう人ですね。思考の道筋を全く説明してくれないから、こっちは右往左往しながら正解を探さないといけないという・・・やっぱり、遠子さんに似てませんか・・・？

「オータも、ダメダメだよ。今ちゃんと言わなくちゃ。もうずっとずっとずっと夏川遠子の大大ファンなのに、なんでちゃんと言わないの？」

ぷくうっと膨れた、ふくれっ面もキュートだ。年相応の男性性を、欠片も感じられない。やっぱりアイドルだよなあ、佐倉さん。アイドル路線の王道ここにあり。って、そんなことより！

「あら、そうなの？」

遠子さん、あからさまに嬉しそうです。最近、ファンなんですって言って下さる方、減ってますからね。

「あ、ええ。はい。」

バツが悪そうに俯いて、ぼんのくぼを左手で抑える。この反応は、もしかして、本当にファンなのかな？社交辞令ではなくて？

「夏川さんのご出演された作品で、今観ることができるものは全て拝見いたしました。日本最高の女優さんだといつも言っているの、相方なりに気を利かせた積りなんです。申し訳ありません、お騒がせして。」

なんてことだ。今を時めく高良王子が、今や全く時めかない夏川遠子のファンだなんて！

「お騒がせて、何？本当のことじゃないか。オータおかしいよ。だって、音楽番組にしか出ないって言っていた癖に、夏川さんに一目会いたさにこの番組の出演受けたくらい大好きなのに。」

ええええ！それって、それって、相当本気で好きですよ、高良さん？

「ちゃんとやわなくちゃ、伝わらないよ。」

ああ、ぼんのくぼ抑えっぱなし。こんなに気まずそうな高良さん、初めて見た。メディアではいつも、俺様王子様高良様なのに。本当は照れ屋さんなのかなあ。

「そうなの、王子様？」

やっぱり、にっこり笑うと綺麗だ。皺だらけなのに、微塵も気にならない。女優さんって本当にスゴイです。

「ああ、もう、かず、俺にだって段階を踏ませろよ。」

あれ？さっきまで、そんな喋り方じゃなかったですよ？

「ファンですよ。」

あ、ふっきましたね、何か。オーラ、出てきましたよね？さっきまでエリートサラリーマンにしか見えなかったのに、今、完全に貴方が王子に見えます・・・

「あなたのファンです。」

颯爽と、遠子さんに歩み寄り

「それも熱烈な。」

まっすぐに遠子さんを見つめて、視線が1ミリもブレない。

「演技の素晴らしさは言うまでもありませんが、時々突飛な行動をなさるところも、発想が常人とは違う角度で飛び出すところも、目下の相手にも真摯に向き合われるところも、お話のされ方も・・・全て、素敵です。」

少し照れるように微笑むと、凜々しさのバリアを破って可愛らしくさえ見え――

「お会いできて、光栄です。」

そっと、跪いて。遠子さんを見下ろしてしまう身長差を、憧れの女優を見上げる距離に変える。漫画チックな仕草なのに、流れるように自然で驚くほど絵になる。

「もしも、御迷惑でなければ、御手に触れさせていただいても宜しいですか？」

しまった、あまりにも格好良すぎて、危うくウツトリしてしまいましたよ。でもそれって、ファンが女優に握手を求めているっていうだけですよ、結局。王子、握手したいならそう言えばいいのに。なんて回りくどい人なんでしょう。これからレギュラーで一緒なのに、猛烈に面倒臭い性格の人だったらどうしよう。

「宜しくてよ。でも、手だけよ。他に触れたら、貴男のこと、許さなくてよ。」

一人の、若く美しい、世間知らずの女・・・が、見えた。思わず目を擦って・・・ああ、遠子さんだ・・・遠子さんですよ？今の乙女も、遠子さんですか・・・？高良王子がそっと、遠子さんの右の掌を両手で包み込み、その甲に優しく口付ける。なんて絵になる、うら若き美男美女・・・って、いや、遠子さんですよ？遠子さんだ。でも、声も乙女の声、仕草も乙女の仕草。遠子さん、まるで遠子さんじゃないみたいだ。と、言うより、遠子さんが、まるで王子より年下になってしまったみたいだ。

「御手だけ。」

悪戯っぽく笑う高良王子に漂う、半端ない色気・・・この人、あれですね、白馬の王子様っていう爽やかな感じではないです。黒いです。肌の色がこんなに白いのに、オーラが黒いです。黒王子って呼んでもいいですか？

「・・・面白い子ね、王子様。」

ずっと、遠子さんが遠子さんに戻る。そうでしょう、やっぱり遠子さんは、遠子さんなんですよ。うちの母より年上で、小柄で華奢なのに貫禄の立ち姿で・・・さっきのあれ、なんだったんでしょう？

「有難うございます。夢の一時でした。」

王子も、ずっと立ち上がると、もう色気もオーラも何処かへ片づけてしまって、佐倉さんのマネージャーのように元の場所に収まってしまって・・・何なんだ、この二人。僕より遠子さんと息が合ってませんか、高良さん。女優とファンの間に、一体今何があったんですか？

「また、楽屋へ遊びにいらしてね？お煎餅、用意しておくわ。今日から宜しくね、佐倉ちゃんと執事さん。」

良かったあ。夏川遠子、SAKURAを気に入ったみたいだ。ほっとしましたよ、遠子さん。王子が使用人にステイタス・ダウンしてしまったことはこの際良しとしましょう。

「はい！煎餅万歳！いい人だし、いい女優さんだし、俺も夏川さん大好きになっちゃいましたあ。」

失礼なのに、憎めない。なんてお得な性格なんでしょう、佐倉さんって。

「俺、また来ます！」

爽やかで、輝いていて、白王子って呼びたくなります。王子と違って、佐倉さんにはオーラを上げ下げするツマミが付いていないみたいですね。ずっと全開でみんなのアイドルです。これはこれで、疲れそうだなあ・・・

「宜しく願いいたします。」

深々と頭を下げて、佐倉さんを押し出すようにドアの外に追いやり、高良王子が静かに扉を閉めて去る。楽屋が途端に広くなったような気になりますね。あの二人が居ると、それだけで華やかだからなあ・・・

「あの王子様、本当に観てくれているのね。」

遠子さんが、柔らかく微笑む。それって、社交辞令じゃなくて本当にファンだって確信できたってことですか？

「懐かしかったわ、『庭師』。」

「にわ・・・？」

「『庭師』よ。そうね、知らないわよね。若い方は普通、知らないのよ。十代の頃に出た映画なの。深窓の御令嬢が居てね、毎年夏になると決まった別荘で過ごすの。そこに雇われている若い庭師が彼女に恋をしていて、身分違いの恋の物語が始まるの。勿論、お互いに想いが遂げられないことは分かっているのよ。分かっている、静かにお互いを思っているの。そういう映画だったわ。さっき、あの王子の坊やが言ったでしょ？『お会いできて光栄です、もしもご迷惑でなければ御手に触れさせていただいて宜しいですか？』って。あれ、庭師のセリフよ。お互いに本当はずっと遠くから相手を見ていたのだけど、お父様の再婚に合わせて花壇の改修をすることになって、そこで正式に顔を合わせて、初めて会った風を装って挨拶を交わすのよ。」

「そうなんですか。申し訳ありません、不勉強で。」

恥ずかしい。自分の担当している大女優の映画も観ていない上に、それを模して挨拶して下さった高良王子を芝居がかったメンドクサイ人だと思ってしまったなんて。

「私もついつい、映画通りに答えてしまったわ。」

だから、か。そうか。それで、遠子さんが乙女に見えたんですね。流石、大女優。圧巻でした。本当に、うら若き御令嬢に見えました。初めて見ました、遠子さんの演技。この人、本物だ。本物だって、知っていたはずなのに、打ちのめされました。

「あの仕草も、映画通りなんですか？」

「そうよ。庭師はお嬢様の手に口付けて、届かない恋の思い出にしようとするの。本当に、よく観てくれているわ。」

「その後二人は、どうなったんですか？」

「あら、アオくん、ダメよ、ちゃんと自分で観なくちゃ。映画は、自分で観て感じないとね。」  
・・・はい。遠子さん。僕の不勉強を叱るどころか、優しく解説していただき勿体ない御言葉です。僕、精進いたします。

収録開始。そこにだけスポットライトが当たっているかのようなスター・オーラでSAKURAが目立っていますが、メインはクイズなのでなんとか收拾がつきそうです。

「今回から、新レギュラーとしてSAKURAの御二人に加わっていただきます。」

「はい！佐倉ちゃんです！佐倉和磨です！」

眩しいなあ、佐倉さん。トップアイドルを見ているみたいだ。

「高良桜太です。」

王子も、オーラ出てる方のヴァージョンですね。当然か。

「俺たち、二人でSAKURAです！」

元気だなあ。間違いなく、皆に好かれる人ですね、この人。

「宜しくお願いいたします。」

高良さんが締めると場が収まるなあ。やっぱり、バランスいいですね、SAKURA。セゾン、やるなあ・・・

SAKURAの紹介VTRがここに入る、と・・・知らない人なんて居ないでしょう、今や・・・って、遠子さんはご存じなかったか、そういえば。あ、VTR、一応観られるんですね。遠子さんのためかなあ、なんて勘繰り過ぎかな・・・？

「SAKURA。インディーズの売上枚数記録を持つ彼等も、今年でメジャーデビュー五周年。この五年間で様々なタイトルを獲得してきた、人気・実力ともに今、日本トップクラスのアーティスト。オレンジに染めた髪がトレードマークでアイドル的人気を誇る佐倉和磨と、ファンの間では『王子』と呼ばれるカリスマ高良桜太の、男性二人による音楽ユニット。ダンサーとしても評価の高いメインヴォーカル佐倉の圧倒的なパフォーマンスは、日本のみならず海外にもファンを急増中。プロデューサーでもある高良の創り出す楽曲は、若者を中心に幅広い年齢層から絶大な支持を獲得。今後も目が離せない二人が、初のテレビレギュラー出演です。」

まあ、無難な紹介じゃないでしょうか。VTRも、新人賞の時と去年の四冠の時と、音楽番組の出演映像、それから宣材写真。無難ですね。

「御二方とも、クイズはお得意でいらっしゃいますか？」

「得意ではありませんが、勉強になるので観るのは好きですね。この番組も、欠かさず拝見させて頂いていましたが、家で観ていてもそれほど当たらなくて・・・この席に座らせて頂いて、プレッシャーのかかる中でどれだけ出来るのか、少し不安ですね。」

「高良さん、観てくださっていたんですね。」

「オータは、クイズ好きなの。で、夏川さんのファンなの。だから、この番組大好きだよね？」

「夏川さんのファンでいらっしゃるんですか」

意外ですよ？僕もでした。

「はい。」

あ、ぼんのくぼを抑えている。あれ、照れ隠しの時の癖なのかな？

「先ほど、楽屋に挨拶に来て下さったの。古い映画を本当によく観て下さっていて、嬉しかったわ。わたし、久々に『大女優』だなんてヨイショされちゃったの。」

ナイス遠子さん、フォローの間が絶妙です。でも、僕だって大女優だと思ってますよ、常々。今日確かに、その才能の片鱗を拝見させて頂きましたし。

「それって僕らが普段、大女優扱いしてないみたいじゃないですか！」

「大女優だって皆思ってますよ。ただ、言う機会がないだけで。」

レギュラーの芸人がカットインしてくる。良いですね、メンバーが変わっても和気あいあいムードです。正直、ほっとしました。

「嫌だな、ヨイショじゃありませんよ。大先輩に対して生意気に聞こえるかもしれませんが、本当に素晴らしい女優さんだと思っていますし、御仕事ぶりを尊敬しています。夏川さんのご出演された作品には良いもの多くて、刺激になりますしね。」

気のせいかな、「女優さん」の部分にアクセントがあったような・・・まあ、でも、それはそうでしょうよ。女優さんとして尊敬、に決まっています。こんなご老体（すみません、失言でした）に女性として、の興味なんて湧きますか？湧くはずもないでしょう？

しかし、これは夏川遠子にとって良い風が吹いているんじゃないですか？若手音楽プロデュ



ーサーのトップランナーが、往年の名女優の演技に創作上の刺激を受けていると言ってくれているわけです。放送の翌日、レンタルショップの在庫表から夏川作品消えますよ、絶対。

オープニングトークの後は、早速VTR。クイズの始まりです。SAKURAの二人、上手くやってくれるでしょうか。僕は遠子さんさえ良ければいいんですけど、やっぱり新レギュラーの能力値は気になりますからね。あ、パネル席で二人でじゃれてる。マイク入っていないから聞き取れませんが、あれ、絶対佐倉さんが叱られてますね。「俺、〇〇だと思う。」「バカ。xxだろ。こら、勝手に書くな！」っていう会話が繰り返されていますね、あれは。間違いない。あ、高良さんが佐倉さんのペンを取り上げた・・・これ、ファンは喜ぶだろうなあ。素のSAKURAなんて、今まで見られなかったですからね。おお、正解。流石は遠子さん&王子。二人とも賢いなあ。ふてくされてるなあ、佐倉さん。ふわふわな髪をふるふる振って、小さな子供みたいで可愛らしいなあ。って、僕完全に視聴者目線になってしまっていますね・・・ダメだ、これじゃ。

今回のトップは夏川遠子。まあ、当然ですね。今回の、と言うより、今回も、です。遠さんは博学だし、頭の回転率がちっとも低下しないんですよ。秘訣を教えて貰いたいものです。二位はSAKURA。最後の問題で佐倉さんが意地を張って答えていなかったら同率首位もありえましたが、このすっとぼけた相方を抱えている限り、高良さんの一位は難しそうです。ここは遠さんに花を持たせてくれたのかもしれませんが・・・

「初参戦のSAKURAの御二人、いかがでしたか？」

「楽しかったです。でも、俺が答えてるのに、すぐオータが消して違う答え書いちゃうんです。ちよっと不満です。」

「採用できる提案をしるよ、かず。クイズ番組は初めてなので緊張しましたが、皆さんが温かく迎えて下さったので良い緊張感に変える事が出来たと思います。ビギナーズ・ラックだと言われないように次回も頑張りたいですね。」

「いや、高良王子は大したもんですよ。初めてでしょ？それで二位取られちゃったんですよ？俺ら一体何年レギュラーやってるんだっていう話になっちゃいますよ。もう、本当に佐倉ちゃんが居てくれてよかった～って感じですね。」

「ちよっと、それ、どおいう意味ですかあ？」

佐倉さん、あの、そういう意味だと思いますよ、僕は。

「佐倉さん、次回は頑張ってくださいね。」

「はい、頑張りますっ！」

ふざけて敬礼のポーズなんてして。年齢的にはかなりイタいはずなのに、どうして似合うんだろう。やっぱり男も顔ですね。

「では、今回から新しくなったエンディング・テーマをお聴きいただきながらお別れです。歌っているのは、SAKURAの御二人です。ご紹介をお願いできますか？」

「えっと、俺たちの新曲です。オータにしては可愛いよね？俺、好き。」

「明確には提示していないんですが、お聞きいただければ一人称が女性だと気づいて頂けると思います。女性目線のリリックには初めての挑戦で、勿論リアルではないのですが、それが楽曲の少しファンタジックな雰囲気合っていると思っています。女性寄りのリリックを女性シンガー

に楽曲提供するのではなく、あえて男性のかずの声で聞いて頂くという・・・」

「ながーい。むずかしーい。ダメダメ、オータ。この曲はね、可愛いの！それだけ！それではお聴きください。『クイズに恋する女の子』。」

「『Ms. C』だ、かず。」

「はい、OKです。」

OKかかっちゃいましたよ、あの曲振りで。やっぱりお馬鹿だなあ、佐倉さん。そして可愛い・・・多分、可愛い曲でも佐倉さんならキュートに歌いこなしてしまうんだろなあ。でも、高良さんの佇まいから、微塵も「可愛らしさ」なんて伝わってこないんだけど、一体どんな曲に仕上がっているんだろう。しかも女性目線って、セゾン・プロには珍しいんじゃないだろうか。

「これ、オンエア上はこのあとPVですか？」

「いえ、いつも通り次回予告の映像が流れます。BGMにエンディング・テーマです。」

「えー、勿体ない。PV独占放送とかやったら、絶対数字獲れるのに。そこんとこどうなんです、SAKURAさん？」

「俺たちも、そうしていただけるとCM打つ必要が無いんで助かるんですが、まだ完成してないんですよ。」

「え、出来てへんの？新曲出すんやったらもう作っとかなあかんのちゃう？」

「だってえ、オータ最近ばんばん曲持ってくるんだもん。オータの曲、ジャンルがあっちこっち飛ぶから、毎回踊りもテイスト変えなくちゃいけなくなっちゃうでしょ？だから振付考えるの全然間に合わないもん。」

もんって。二十歳過ぎた男が「もん」って・・・ああちくしょう、可愛いなあ佐倉さん。男の僕から見ても可愛く見えるんだから、女性ファンからしたら堪らないんでしょうね。

「そっかあ、佐倉ちゃんが振付やってるんだよね。なんか、王子が音楽作ってる印象強すぎて、佐倉ちゃんが振付やってるって忘れられがちだよね。」

「ただのアホな子やないんやなあ・・・」

「アホな子って言われたああ！オータあ！」

助けてっていう目で王子を見上げる。いちいち可愛いなあ、もう。動きが全部、小動物みたいだ。

「よく知って下さっていて有難いじゃないか。」

あー、あっさり捨てられている。この二人、見てて飽きないなあ。もっとバラエティーに進出すればいいのになって思いませんか？やっぱり「ミステリアス」路線をキープするために露出をセーブしているのかなあ。プロフィールもほとんど公開されていないし、アイドル雑誌のインタビューには答えているけれど、あんまりプライベートの情報は漏らしていないようですからね。

「でも、かず。PV撮り、明後日だからな。」

「わかってるよお・・・」

「撮影に間に合わなかったら、今後お前宛に届くファンの煎餅は全部没収だ。」

「やだああ！」

スパルタ方式なのかな、SAKURAって。ちょっと気になりますね、どんなPVに仕上がるのか。上

品な笑い声がして——あれ、遠子さん、楽しそうですね・・・???

「アオくん、あの子たち面白いのね、ああ、お腹痛い。」

いつのまにそんなに笑いのツボに入っていたんですか？

「本日は有難うございました。」

老女に気をとられているうちに、さらりと目の前に現れたのはキラキラ・コンビ。

「有難うございましたあ。」

白黒オセロ王子、輝いているなあ。

「また今度ね、トコさんっ！」

ああ、白王子、全開で手を振っている・・・って、トコさんって、トコさんって・・・うちの大看板にトコさんって・・・なんて全開で失礼な・・・ああでも、なんでそんなにキラキラしているんだ、無駄に可愛いぞ、ちくしょう。って、もうどこかに行ってしまうんですか、白王子。オレンジの頭をふるふる振っている・・・アイドル超えを果たしたなんて言われている天下のSAKURAのヴォーカルが、全開で悩んでいる・・・佐倉さん、なんでも全開なんだなあ。さては、振付を考えているのかな？

「キュートね、佐倉ちゃん。」

去っていくオレンジを微笑ましげに見送る我らの夏川遠子と、立っただけで無駄に色っぽい黒王子。

「それが、SAKURAのウリの一つですから。」

「キュートに見せかけているの？だとしたら、相当な役者さんね。」

「みせかけている、わけではありませんよ。あの性格も、あの挙動も、天然です。ただ、その持ち味を活かすために、俺からスタイリストさんに頼んで服装も髪型も作りこんでいます。可愛い、を武器にするために。」

「あら、ミュージシャンなのに可愛いのが武器なの？」

「可愛いだけだと思わせておいて、マイクを持った途端に豹変する——そのギャップが、あの声に更にカリスマ性を生むんです。もし機会があったら、かずの歌を是非聞いてやって下さい。歌手として、あいつは間違いなくホンモノです。俺が音楽に携わっているのは、あの声が相棒だからですよ。」

そうなんです、佐倉さんの声はもう絶品なんです。普段話していると、すこしピントのぼやけた丸みのある声で、確かに大人の男としては高い声ですけど、そんなに気になる声ではないんです。それが、歌い始めた途端に、誰もが振り返らずにいられないんです。しっとりとしていて、圧倒的な声量と声の伸び・・・本当に鳥肌が立つんですから！しかも、最高音域にさえ柔らかさがあるんです。

「あなたの声は、どんな声なの？」

ああ、遠子さん、その質問は僕に答えさせてください。喋っていると普通の若者でしょう？

そりゃ、耳障りな声ではないですよ。でも、取り立てて言うほど特徴のある声でもない。佐倉さんの声より少し落ち着いて聞こえる程度です。それが、歌いだすと、声だけで女性を悩殺してしまうとCDショップのポップにも書かれているほどの甘い低音。ユニゾンの時はわざと声色を喋る

ときのように合わせて、佐倉さんの声に寄り添うように歌うんですが、ソロパートは流石に本域ですからね、男の僕でも女性には支持される声だろうとわかる甘い甘い声で——でも、品があるんですよ。品があるから、甘い声でもいやらしくないんです。歌い方を変えられるということは、きっと器用なんでしょうね。

「普通ですよ。まあ、かずとは音域が違いますから、低音はソロで歌うこともありますけど、基本的にはかずの歌を引き立たせる係です。」

王子、謙遜のしすぎです。もっとガツガツ自己アピールしてもいいのに。だって、未だに信じられないけれど、うちの遠子さんのファンなんでしょう？遠子さんに良く思われたいんじゃないんですか？

「それでいいの、音楽家の王子様は？」

「いいんですよ、俺は。」

「作詞作曲、しているんですってね？」

「夏川さんのお気に召すかどうか、わかりませんが。」

召しますよ、うちの遠子さん、結構音楽に対する許容範囲広いんです。クラシック好きが有名すぎて、オーケストラしか聞かないなんて思われていますが、ロックだってポップだってちゃんと聞かれています。ただ、耳は肥えていますから・・・いや、きっと大丈夫、SAKURAの音楽性なら大丈夫・・・だと思います、僕は好きですよ、SAKURA。CMソングだったデビュー曲だって、キャッチーなサビで爆発的な人気を博しましたが、全曲通して聴くとボサノバのような雰囲気があって、普通ポップスのヒット・チャートに入るような曲じゃないんですよ。SAKURAの曲はどれも一筋縄ではいかない面白さを隠し持っているんですよ。

「エンディングに流れるんでしょう？聞いてみるわ。」

「夏川さんに聴いて頂けるなら、奇を衒わずに今まで通りの路線でいけばよかった・・・」

あ、例の女性目線のファンシーな曲だという新曲ですね。どんな曲になるんでしょう。気になります。って、おおおお王子！何やってるんですか！夏川遠子に、みみみ耳打ちですとお・・・なんてことを！一体、いつのまにその距離を詰めたんですか！っていうか、僕、遠子さんを守れていません・・・仕事できてないじゃないか、僕。

「なんて、ね。夏川さんの御耳に入ることが決まっているから、この曲なんです。」

低く囁くと・・・歌声のように甘い。って、何ですか、その爆弾発言。あ、もう離れた。素早い身のこなし。流石セゾン。ダンスで鍛えていますね。

「あなたは、面白い子ね。」

「有難うございます。また、次回の撮影も宜しく願います。」

あ、オーラが無くなった・・・営業終了かな。王子って、なぜかつワモノ感漂っていますよね・・・

「では、かずを連れて帰らなくてはいけないので・・・失礼します。」

踵を返す。途端に走り寄ってきたのはオレンジ頭。

「迷子になったらダメだよ、オータ。」

「・・・楽屋がわからなくて戻ってきたんだな。」

つまり、白の方が迷子だったわけですね。さも黒が迷子のように言っていますが。

「お前が勝手に走って行ったんだろう。帰るぞ。」

「うん！」

飼い主と子犬・・・なんて連想ゲームしている場合じゃありません！僕だって、お仕事、お仕事！

「楽屋へ戻られますか？」

「そうね。」

孫みたいな年齢の若者が突然耳打ちなんてして、驚かれたかと思いましたが、肝っ玉が違いました。やっぱり夏川遠子は流石に揺るぎないですね。

「あの子たち、面白いわね。」

「そうですか？僕は冷や冷やしました。夏川さんにあんな・・・」

「そうね、殿方をあんなに近くで見たのは本当に久しぶりだったわ。」

と、殿方・・・

「あんなに挑発的な事を言われたら、ちょっと聞いてみたいわね、あの子たちの音楽。」  
ここが遠子さんの素晴らしいところなんですよね。腹を立てるところか、興味を持つ。本当に好奇心が旺盛なんです。大御所の中には「なんだあの小僧は！」なんて怒り出す人もいますから、本当に担当が遠子さんで良かったですよ、余計な気を回さなくて済むので。

「聞かれますか？移動車に多分、CDがありますよ。」

「そうなの？アオくん、好きなの？」

にこりと笑って僕を見る、老いてなお整った顔。歳を経ても、年齢を重ねたなりの美しさがあるのが本物の美人だ、美人だと言うときはその人が年を経ても美しいと思えるかを考えてからにしる、なんてよく言われますが、そこいくと夏川遠子は本物の美人です。というか、本当に美人だったんだろうな、と思います。

「まあ、今、人気がありますから・・・ただ、番組の曲はまだ発売されてませんので、高良さんが聞かせたいと言われていた曲はありませんが・・・」

「いいわ、それで。佐倉ちゃんの声がどんなだか、聞いてみたいの。」

「それなら、お任せ下さい！今まで出ているCDは全部ありますよ。」

## 告白は耳もとで

---

夏川遠子は、大女優ですよ。うちの看板ですよ。それなのに、ちょっとスタッフに呼ばれて楽屋を空けた隙に、なんでこんなことになっているんですか……？

ええ、例の番組の収録ですよ。分かっていますよ、SAKURAは共演者だって……でも、なんだってうちの夏川の楽屋でリラックスしているんですか、佐倉さん。遠子さんも、何勝手にまだよく分からない相手と和んでるんですかっ。

「だって、トコさん、煎餅くれるってこないだ約束してくれましたよね？」

「だからって……」

「いいじゃない、アオくん。ほら、陽志郎くんが差し入れてくれたお煎餅、あったでしょう？あれ、御出しして。」

「はい。」

「やったあ！」

この煎餅、一枚三百五十円なんですよ。ふう。いいもん食ってるなあ、大物は……っと、お茶、お茶。お茶淹れなくちゃ。

「佐倉さん、緑茶でいいですか？」

「うん、お茶も好き〜。」

ああ、自由だなこの人。遠子さんといい勝負だ。

「そういえば、聞いたわ、あなたの歌。」

「本当に？嬉しいです！オータの曲、結構いいでしょ？」

ああ、失礼だなこの人。失礼さがかき消されるくらいのアイドル・オーラがなかったら、多分簡単に潰されていますよ、この世界じゃ。

「そうね。それに、あなたも。とっても素敵な声。」

「オータにも言ってあげて！……ください。オータね、すっごく好きなの、トコさんのこと。だから、トコさんが褒めてあげたら喜ぶよ、ます！」

ああ、なんて敬語の下手な人なんだ！

「無理しなくていいわよ。ざっくばらんに行きましょ。私もお若い方とお話する機会が少ないから嬉しいの。」

あのう、遠子さん、僕も若い方だと思いますが……

「有難う。トコさん優しい。オータと大違いだ。」

「そういえば、振付は間に合ったんですか？」

差し出がましいとは思いながら、聞かずにはいられなかった。だって、気になりますよね、PVがどうなったのか。

「間に合った……オータ怖いんだもん。鬼だよ、あの人。イケメンなのに、容赦ないんだよ。」

「イケメン、ですか？」

おいおいおい、普通、自分の相方をそんなさらっと褒めますか？しかもネタでもなんでもなく。

「うん、オータはイケメン。でも鬼なの。出来上がるまでスタジオに閉じ込められて、トイレと風呂以外移動できなかつたんだから。びっくりだよ。あんな可愛い曲なのに、作ってるのは鬼だよ、イケメンの鬼なの。」

イケメンという評価は揺るがないんですね、いや、別にいいですけど。

「そうだ、トコさん注意してよ、オータに。怒ってばかりだとイケメン台無しだって。怒ってもイケメンだけど、俺、怒られたくないもん。」

「私が？」

「トコさんの言うことならなんでも聞くよ。だってオータだもん。オータ、トコさんのこと好きだから。こないだもね、収録の後なかなか車出してくれなくて、見たら震えてたんだよ。あのオータが！震えるほど、トコさんのこと好きなんだなって思ったら、俺、何にも言えなくて・・・オータ、よっぽど緊張してたんだなって・・・変だよ、オータ。今までどんな人と仕事しても強気だったのに、社長の言うことなんて全然聞かなくても平気なのに、トコさんは違うんだもん。こんなに優しいトコさんなのに、なんで緊張するんだろうね。好きだと緊張するのかな？俺はオータが仕事の話するときが一番緊張するけどなあ。」

え、震えたって・・・あの高良さんが、ですか？あんな大胆な行動とつといて？だから後悔して震えたとか・・・？いや、あの高良さんが羽目を外すような人だとは思えないし・・・っと、ノックの音がしていますね。出なくては。

「はい。」

扉の向こうは———噂のイケメン。

「おはようございます。青井さん、うちのかずを見ませんでしたか？ちょっと楽屋を空けた隙に居なくなっていて・・・あいつ、多分、一人ではもとの部屋へ戻れないので・・・」

相変わらずマネージャーみたいな仕事しているんですね、売れっ子プロデューサーとは思えない・・・しかも、オーラ消していてもイケメンだ、確かに。

「あっ！オータの声だ！」

こっちこっち、とぶんぶん手を振る。まるでカフェで友人を呼ぶように。あのう、ここ、夏川の楽屋なんですけど・・・

「・・・失礼しても？」

片眉を上げて僕に問いかける。こうなると、こう言うかないしかないでしょう。

「どうぞ。」

大丈夫です。夏川遠子が頷くの、ちゃんと確認しましたから。こう見えて、僕、ちゃんと遠子さんのこと見てるんですよ、いや、それが仕事なんですけども。

「おはようございます。本日も宜しくお願いします。かず、煎餅をこぼすな。」

「こぼしてないもん。」

こぼしていますよ。がっつり。なんでそんなすぐバレるウソつくんですか、このキラキラした生き物は。

「申し訳ありません、楽屋を汚してしまって・・・」

「いいのよ。孫みたいでかわいいの。って、おかしいわね、私、子供もいないのにね。」  
大丈夫です、誰もつつこんだりしませんよ。孫みたいですよ。微笑ましいです。でも、不思議と友達感覚のような雰囲気も生まれかけていませんか？人懐っこいからなあ、佐倉さんも遠子さんも。

「可笑しくはないですけど、少し、寂しいですね。」  
黒王子は、なぜか孫には見えません。近所の子供、とか？違うなあ・・・でも、年齢的には佐倉さんより若いわけですから、よっぽど孫なんですけど・・・

「寂しいの？」  
「憧れの女性から孫扱いされるようじゃ、俺もまだまだってことですよ。思い知らされるから、寂しいんです。」  
憧れの、女性って・・・ああ、憧れの女優ってことですよね。そりゃSAKURAなんてまだまだですよ。大女優ですから、うちの夏川遠子は。生ける伝説ですよ、何と言っても、テレビと同じだけの歴史があるんですから。

「あなたの声も、思っていたより良かったわ、王子くん。」  
また新しい呼び方になっていませんか、遠子さん・・・  
「聞いて頂けましたか。嬉しいです。」

あ、左手がぼんのくぼへ。この瞬間だけ、歳より幼く見えますよね。普段大人っぽいのに。  
「あなた、耳がいいのね。」  
そりゃ、作曲家ですから耳はいいでしょうが・・・あれ、そんなこと車では言ってなかったのに。

「恐縮です。」  
「あなた、正解よ。佐倉ちゃんの声は、本物ね。」  
来た、夏川遠子のお墨付き！

「でも、あなたの声も悪くはないわ。」  
ですよね、遠子さん！  
「確かに本物の持つ力は無いわ。でも、私が出会った本物の歌手は、この長い人生で、こんなにあちらこちらの国へ行って、それでもまだたった五人よ。佐倉ちゃんが六人目。それも、売れっ子さんとは限らなかったわ。不朽の声を持つことと、時代に求められる声であることは別でしょ？不朽の声があっても、求められなければ売上成績は残らないの。あなたの声は、不朽の声じゃないわ。でも。時代に求められている。いいバランスだと思うわ。それに、本物の声は誰もが認めるけれど、誰もが好きかしら？認めることと好き嫌いは別よ。佐倉ちゃんの声はとっても素敵だけれど、私は、あなたの声の方が好きよ。」

うわ、遠子さん、そんなにベタ褒めしたら・・・ほら、ぼんのくぼに手がひつついちゃってますよ！もう顔上げられないですよ、高良さん。

「ん、オータはね、声もイケメンなの。」  
ああ、なんてぎっくりとしたコメントですか、相方なのに。そもそも、あなたも褒められていたわけで、お礼とか照れとかないんですか？



「参ったなあ・・・そんなこと言われたら、もう口に出してしまいそうだ。」

艶っぽい仕草で顔を上げると、高良さんの黒王子オーラが立ち籠めていく。やっぱり、この人もアイドルの卵だっただけのことはある・・・強烈な色気を放っているけれど、それが下品には決して見えないから安心してお茶の間で見られる。育ちが良いんだろうな、きっと。

「好きですよ。」

どきりとなりました。僕が言われたわけじゃないのに、僕は男なのに、それでもどきりとなりました。甘い低音ヴォイス。囁くようなのに、耳に絡みつく・・・って、そこ！何そんな大接近してるんですか！まだ・・・一体いつのまに遠子さんの耳元に居るんですか、この低音王子は！

「僕も、夏川さんが好きです。僕は、声だけじゃ、ありませんけど。」

あああ！あんな近くで囁いたら、もう抱きしめているも同然の距離感じゃないですか！しかもあの身長差があったら尚更です！なんですか、あの失礼王子は！ファンならファンらしく、もっと節度を守ってもらわないと。このモノクローム・デュオのファンがあそこまで彼らに接近したら警官が登場してしまうところですよ。

「オータ、珍し。本気なんだね、なりふり構わないんだ・・・」

「どういうことです？」

「あれ、オータ最大の武器。絶対、女性には使わないの。オータの声、耳元で聞くとだいたいの女の子はウツトリしちゃうから。イケメンの声、フェロモンガがいっぱいなの。だから、たとえ相手が小さな子供でも、女の子だったら絶対耳元では話さないんだよ。オータと電話してオータにメロメロンになっちゃった女の子のスタッフとか目茶苦茶いっぱいいるんだから。だから、わざと喋るとき喉に力入れて俺の声に似せたりするんだよ。メンドクサイっていつも言ってる。それなのに、あんなに近くで話してるなんて・・・」

なんだかよくわかりませんが、モモンガが飛び出してメロンを食べるわけですね、大変だ・・・って、違う！うちの看板に自慢のフェロモン攻撃しかけて何しようっていうんですか、この若者は！

「高良さん！佐倉さんに御用事があったのでは・・・？」

引き離さなければ。うちの看板になに悪戯してくれてるんですか！夏川遠子は、そんなモモンガにはやられませんよ。

「そうでした。かず、メイクさんが待っていたぞ。」

「もうそんな時間？」

「ああ、その寝癖さっさとどうにかしてもらえ。夏川さん、お騒がせしました。また、後程。」  
嵐だ・・・嵐のように去っていく。なんなんですか、あの二人。いや、いい歌手ですよ、いい歌手ですけど、それで全てが許されるわけじゃないでしょう？高良さんにいたっては、一体うちの夏川遠子にどんな恨みがあるんですか？絶対に女性にはしないこと、をうちの夏川遠子にしているって・・・何ですか、うちの名女優が女性ではないとでも・・・？それとも、御自慢のモモンガがどこまで飛べるのか・・・じゃない、自分のフェロモン体質が一体何歳の女性まで効果的か試しているんですかね？失礼だ、失礼すぎる。

「ほんと、いい声してるわ、あの子。」

ああああ、ダメです、ダメです、遠子さん。あんな失礼小僧の悪戯にひっかかってはいけません！

「面白い子供たちよね、アオくん。」

「あ、はい。」

正直、ほっとしました。そうですよ、子供たちですよ、夏川遠子にとっては。ジャリジャリですよ。良かった。流石大物、悪戯には引っかかりません。

「今日の収録も、王子と夏川さんの一騎打ちですかね？」

「あの子、若いけど色々勉強しているみたいね。前回そう思ったわ。私もうかうかしてられないわね。」

夏川遠子、年齢は・・・最近是非公開ですが、衰えぬ知識欲に脱帽です。

収録は和やかに済みました。あいかわらずのオセロ・デュオのサイレント漫才は、この番組の新しい名物になるかもしれません。今日は遠子さんとレギュラーのタレントさんが同率一位。白がでしゃばった**SAKURA**は、黒の健闘むなしく三位に散りました。

「そういえば、この間撮ったやつ、今日放送やないの？」

「今、放送中じゃないですか。先週から今週にかけて、スケジュールいつもとだいぶ変わってしまいましたからね。売れっ子さんに合わせて。」

「売れっ子さん？あ、今日のゲストの？」

佐倉さん、天然ってイヤミさえ殺すんですね。勉強になります。

「**SAKURA**の新曲PVって、間におうたん？」

「お蔭様で、ギリギリ。先日ここでお話に出して頂いたので、急遽流して頂けるようになって・・・でも危なかったですよ。今朝までかけて、なんとか仕上げました。」

「ほなら今まさに出来立てほやほや、完全初公開でエンディングに流れるんか。観たいなあ、見れる？見れるって。」

あ、それ、僕も見たいです。その、全然高良王子らしくないという新曲。モニターの前に、レギュラー陣が集まって行きますね。あ、遠子さんも動いた。よし、遠子さんの横で見よう！「『**Ms. C**』だ」と、高良さんのツッコミが入る。なんか変な感じですね、これ、目の前で見ていたのに。慣れないなあ、この感覚。そして、PVが始まり、音楽が流れ始める。途端、ざわざわと周りが騒がしくなりました。誰もが感想を言い合わずにられないという感じです。確かにこれは、僕も誰かと話せるものなら話したいです。なんですか、これ。確かに、**SAKURA**にしてはあまりにもポップ。驚くほどポップ。音が弾けるような、元気でキュートなサウンド。なんと表現したらいいんでしょうか。色んな色のロリポップを束で抱えて無作為に舐めている外国の少女を見ている感じ——伝わらないよなあ・・・。PVもお菓子や玩具が沢山出てくる、カラフルな仕上がりです。ペロペロキャンディーを頬張る佐倉さん、沢山の風船の束を持った高良さん、白いウサギの着ぐるみを来た佐倉さん、マーブルチョコの海にダイブする高良さん、そして仮装して踊る**SAKURA**。これって・・・アリスですよ、『不思議の国のアリス』。「いかれ帽子屋」の仮

装がやたらスタイリッシュに見える高良さん、そしてこの可愛いアリスは・・・まさか、佐倉さん？佐倉さんだ。ヴィジュアル系バンドじゃあるまいし、まさかPVで女装するなんて。しかも、可愛い。女装のクオリティが高すぎます。女の子としてもかなり可愛いレベルですよ、これは。佐倉さんって、女顔なんだなあ・・・腰に手を当てて、リズムをとったりして、幼稚園児でも真似できそうなダンスですが・・・佐倉アリスがやると可愛い——けれど可愛いと認めたくない自分がいますね、だって相手は女装した野郎ですよ？でも・・・可愛い！そして高良さん・・・似合わないなあ、このダンス。王子には酷なダンスですね。でも、ちゃんと真面目に営業スマイルで踊っています。見慣れると王子すらも可愛く見えますね、不思議だ。あ、佐倉さんが今度はチェシャ猫の仮装ですね。猫耳、猫の手足、太くて長い尻尾。ファンの悲鳴が聞こえそうですね、これ。どれだけサービスショット満載なんですか。シーズンのファンの女の子たち、絶対好きですよ、こういうお遊び。歌詞は、恋に恋する女の子、という感じですね。恋がしたい、という気持ちをちょっと夢見がちに歌っています。恋がしたい、でも毎日恋なんかなくたって楽しい、でも恋はしたい、恋があれば毎日はずっと楽しい、あの人は私の王子様かしら、それともあの人かしら・・・要約するとそんな内容です。こんな内容のない——メッセージ性も文学性もない詞を、まさか高良王子が書くなんて。あのシュツとした顔で、こんなふわふわした恋に憧れる女の子を描くなんて。でもこれは、きっと、売れますよ。間違いない。SAKURAの曲で、女性ファンがカラオケで歌うのに向く曲は少ないですから、これ絶対皆が歌いたがりますよ。

「なんというか、思い切ったな・・・」

出演者の一人が声を上げます。皆の代弁者ですね。

「ちょっとカラフルな曲に仕上げてみました。」

いえ、そういう理由ではないんですよ、僕らが驚いているのは。分からないかなあ、王子。

「ね、可愛いでしょ？」

満面の笑みの佐倉さん。曲もあなたも可愛く仕上がっていましたよ、確かに。

「可愛い。あたし絶対買う。」

やはり女性受けのいい曲のようです。

「佐倉ちゃん、アリス似合ってるなあ。」

「えへへへ。ちょっと恥ずかしいんだけど、やり切らないともっと恥ずかしい仕上がりになっちゃうから、結構頑張ってるんだよ、あれ。」

「いやあ、可愛いよ。曲も詞も、佐倉ちゃんも可愛い。」

おっしゃる通りです。

「やったああ！オータ、褒められたよ！」

「思い切った甲斐があったな。」

「うん！」

「王子はアリスやらへんの？」

「いや俺は・・・」

「やったらええやん。」

「綺麗に仕上がると思うよ、女装。」

まあ、顔は綺麗ですからね。でもその高身長じゃ、一般的な女装の枠を超えて、どこのスーパーモデルだって話になりそうです。

「でも見たくない気もするな、王子の女装。絶対綺麗そうだけど、見たら呪われそう。」  
分かります。末代まで呪われそうです。「見～た～な～」とか言われて。でも、この曲のどこが遠子さんに聞かせるために作った曲なんですか。女性アイドルが歌ってもよさそうな曲をあえてセゾン男子が歌っているっていうだけでしょうか？遠子さんは何か感じていらっしゃるのでしょうか。振り返ると・・・ああ！また！あのモモンガ！何で当然のように夏川遠子の隣を占めているんですか！

「可愛いよね。」

「可愛い方が、がちがち出来ますから。余計な情報が多ければ多いほど、目的が隠しやすいでしょう？」

「あら、隠し事があるの？判じ物みたいなものかしら？」

「そういう曲も書いたことはありますが、この曲はもっと、シンプルに出来ていますよ。隠してあるものは音楽的な謎ではなく、僕自身の個人的な意図です。」

「私に聞かせようとしているものと関係があるのかしら？」

夏川遠子の目が、きらきらと輝いています。好奇心に火がついているのかもしれませんが。ダメです、遠子さん。モモンガメロンの実験にみすみす乗ってはいけません。

「関係？」

そっと流される視線に、傍観者のはずの僕もどきりとする。これが、アイドル雑誌で「色気の高良」と「可愛気の佐倉」と評されている黒王子の真骨頂。男が男として色っぽいというのはこういうことだ、という正解の一つを見せてくれているようです。年齢を重ねて増す「男の色気」と言うより、まさにフェロモン体質、「セクシャルな色気」ですよ、王子のは。目が眩むほどセクシーなのに、性行為を連想させない清潔感を同じ強さで備えているから、それが「セックスアピール」を「色気」に変換して女性を惹きつけるんでしょう。

「関係があるというより、そのものです。」

「こんな可愛らしい、十代の御嬢さん向けの曲を、こんな御婆さんに聞かせてどうしたかったの？御婆さんにも若者の曲が分かるかどうか、試したかったのかしら？それだったら、そうね、素敵な曲だと思うわよ。」

「お褒め頂き、光栄です。でも俺、夏川さんを『御婆さん』だなんて思ったことは一度もありませんよ。」

何ですかあのメロン王子は、意味深な。ん？誰です、袖を引っ張ったりして・・・って、ささささ、佐倉さん！なんて可愛い・・・じゃない、なんて心臓に悪い。ああ、でも眼福ですね、佐倉さんのどアップ。しかし、オーラが眩しすぎて目を傷めそうです。

「あれ、オータ本気だからね。」

あのSAKURAが僕にひそひそ話だなんて！ああもう、一生の思い出にします・・・じゃなくて、なんですと？

「俺が御婆さんって言うと、オータにすぐ怒られるんだ。オータの理想の女性なんだって。」

「理想の女性・・・女優、じゃなくて女性ですか？まさか、その、そういう対象というわけでは・・・」

「そういうってどういう意味？」

白王子がきょとんとして首を傾げる。可愛いですよ、そんな仕草も。二十代男子とは思えません。性別を超えた何者かですよ。けれど、なんてモドカシイ人なんですか、この人は！

「青井さん。」

頭上から低音が降ってきて、背筋が凍る。まさか、まさか・・・

「知っておいて頂いた方がいいかもしれませんね。そういう対象です。」

出たあ、イケメン！

「あら、そのお話、私は聞いていても良かったのかしら？」

なんで遠子さんまで居らっしゃるんですか！いつの間にですか？あれですか、イケメンのメロン攻撃を浴びると神出鬼没になるんですか？

「参ったな。」

あ、ぼんのくぼ。

「お聞きの通りです。意図、もうお分かりですよ？思い出して頂きたい気持ちがあった、それがこの曲です。」

気持ちを思い出す・・・？思い出せない気持ち・・・？あつ。

「それ、もしかして、」

僕だって、伊達に夏川付のマネージャーじゃありませんよ。先々月の科学特番でうちの遠子さんがベテラン漫才師の方との掛け合いで漏らした一言、ちゃんと記憶しています。「ねえ夏川さん、昔は結婚したいなんてよく言ってましたよね、最近聞きませんが、もう流石に諦めたんですか。」「あら、諦めては無いのよ。でも、早いとこ良い方が現れて下さらないと流石に困るわね。」「まだ結婚する気ですか？」「まだって、私まだ一度もしたことないのよ？」「知ってますよ。知ってますけど、その歳でしょ？恋とかもうしないでしょ？」「そうねえ。もう思い出せないのよ、恋をしたい気持ちが。」「恋するどころか、恋したい気持ちも思い出せないんですか？」「そうなの、ちっとも思い出せないの。」——あの番組、王子も観ていたんですね。いや、当然かな。ファンなんですから。

「それ、思い出させてどうするんです・・・？」

思い切って、訊いてみました。だってそうでしょう？人間には怖いもの見たさっていう感情があるんですよ。

「それは、夏川さんにだけ。」

僕の口に人差し指を当てて、しゅんと唇を動かす。何ですか、この動作がいちいちクサイ感じは。クサイけど、全て格好良く見えるんですよ。イケメンってなんて得な生き物なんでしょうね。動作が六十年前の映画俳優みたいなんです、全部。それなのに現代で人気者って、どういうわけなんでしょう？神様は不平等です。

「そうね、娘の頃が懐かしくはなったわ。こういう可愛らしい気持ち、私にもあったのよね。でも、それだけで恋は始まらなくてよ。お相手がいなくちゃ。」

口に手を当てて声を上げて笑う。夏川遠子は流石に上品ですね。子役時代から当時の最高の役者たちに可愛がられて育っただけのことはあります。優雅な動作が板についているんですよ、うちの遠子さんは。

「思い出して頂いたなら、その次は・・・」

あっ、またメロンポジションに！

「お相手に立候補、させて下さい。」

ばばばばば爆弾発言！！！！

「おおお王子・・・！」

「そこで何故、青井さんが最初に反応するかなあ・・・」

左手がぼんのかぼへまた伸びる。

「夏川さんにだけ、聞いて頂けたならそれで良かったのに。」

そりゃ聞きますよ、僕だって、夏川遠子のプライベートをある程度は管理しておく必要がありますから、耳ダンボですよ。しかも僕、SAKURA結構好きなんですよ、王子の行動はそれなりに気になるんですよ。

「本当に面白い子ね。でも、御婆さんをからかっちゃダメよ？」

そうです、遠子さん、その反応が普通です。正解です。モモンガトラップに引っかかってはいけません。若いファンの先走った思い込みに振り回されては、大看板に傷がつきます。そもそも、何を言いたすんですか、天下の高良王子ともあろう人が！本人がどう思っていようとアイドルですよ、今のSAKURAは。そのアイドルが、まだ二十代の若きイケメンアーティストが、御婆さん（遠子さんごめんなさい）相手に何言ってるんですか！誰がどう見たってどんな美女も思うがままでしょう？そんな若者が枯れ果てた女優と恋？そんなことがありますか！もしもこれで遠子さんがちらっとでもOKサインを出したなら、すぐに覚めて若い女に走るに決まっています！危険です、遠子さん。

「本気ですよ。」

真っ直ぐに遠子さんの目を見つめて、王子は静かに言い切った。告白としてはもう、百点満点の誠実さが伝わってきますよ・・・されているのが王子の御婆さんのようにしか見えない相手でなければ。まあ、そして、その声の「良い声」具合と来たら・・・夏川さんに話しかける時だけ甘〜い低音ヴォイスっぷりを発揮するのは止めてもらえませんか。だって、普段そんな声で話してないじゃないですか、声張って佐倉さんを注意している時とかもっと普通でしょ？そうでしょう？何ですか、わざとですか、作戦ですか、ギャップ萌えですか、モモンガが飛び回っているわけですか？

「ゲームを仕掛けているつもり？私は、あなたの土俵には乗らないわ。」

よっしゃあああ！よく言って下さいました。そうです、あなたの看板に傷はいらないんですよ。

「ゲームだなんて、心外です。」

背の高い高良王子が所在無げに俯くと、淡い影が僕と遠子さんにかかる。その影さえもスタイリッシュに見えるのが、何故か今、無性に悔しいです。

「土俵に上がれだなんて、言いませんよ。ただ、知っておいて頂きたくて。貴女に。」

ぼんのくぼを押さえて、高良王子がはにかむように続けた。

「もうずっと、貴女のファンであり、貴女に恋をしている男でした。貴女にせめて、知っておいて頂きたくて・・・貴女を想っているということ。そうですね、少し、急いで欲張り過ぎたのかもしれませんが。でも僕は、貴女に憧れているだけではもう、満足できないんです。いつか貴女と、恋をしたい。」

王子の切れ長の瞳に、思わず見入ってしまいました。吸い込まれそうな瞳、というものの現物を初めて見ました。はっ！いけません、ダメです、吸い込まれませんよ、僕は。遠子さんだって吸い込まれたりするものですか！

「私がもし、二十代の娘だったなら、あなたに恋をしたかもしれなくてよ、王子様。でも、私はもう、そんな歳じゃないの。あなたがあと五十年早く生まれていたら、あなたのゲームは成立していたかもしれなくてよ、執事の王子。でも、あなたのゲームは始まらないの。永遠に始まらないのよ、どんな声であなたが愛を囁いても。ファンで居て下さるのは嬉しいわ。けれどファンとは恋はできないの。だってそうでしょう、ファンは私を好きなのではなくて、『夏川遠子』を好きなの。だから、恋は上手くいかない。あなたにそれが分からないとは思えないわ、賢い王子。それに私は御婆さんで、あなたは孫みたいな佐倉ちゃんより若いのよ？」

宥めすかすように、遠さんは微笑んだ。女王陛下のような貫禄と気品。誰も夏川遠子には反論できません。あ、佐倉さんが「俺、孫～」とにこにこ笑っています。なんですかあの空気読まない生き物は。

「俺、今、振られています？」

そうですとも。まさか女性に振られたことがないとか言いだしませんよね？あり得る・・・あり得ます、このイケメンめ！

「それ以前の問題だと思いませんか？」

夏川遠子の干からびた皮膚さえ美しく見えるのは、彼女の才能と心が輝いているからだど、何気ない時にふと僕らは思い知らされます。

「スタートラインに立っていないのなら、諦める必要はないと判断します。俺、諦めが悪いんですよ」。

長身のイケメンが、不敵に微笑む。不敵に微笑む、なんて行為がこんなに似合う人がいますか、漫画から抜け出て来たんですか、この黒王子は。

「変わった子だこと。」

「構いませんよ、今はそれで。でも、貴女を手に入れるために、チャレンジする自由は与えて頂けますか？」

「事が後先ではなくて？」

「確かに。この曲は、少し先走りましたね。最初に貴女に許可を得るべきだった。」

「チャレンジ、どうせ、なさるんでしょ？」

「気持ちは止められませんから・・・でも、御迷惑なら、今後行動は自粛します。俺だって、それくらいの自主規制はできますよ。」

「良くてよ。」

なななな、何と今、おっしゃいました？遠子さん？今の流れで、なんで許可与えてしまうんですか？迷惑そうになさっていたんじゃないんですか？何ですかそれ。女心は永遠の謎です……

「気が済むまで、お好きになさったら良いわ。そのうち自分で気が付くわ。なんでこんな、皺くちやの御婆さんを一方的に追いかけているんだろうって。そうしたらきっと、何もかもバカバカしくなってしまうわよ。」

おお、流石大物女優。対応が大人です。小僧は下界で勝手にあたふたしているということですね。上空のベテランっぷりが溢れていて、夏川遠子ここにあり！という感じがします。良いですね、遠子さん。僕、これからも遠子さんに付いていきます！

「オータは、多分、このゲーム、勝っちゃうよ？」

佐倉さんがけらけらと笑って、僕の肩を叩く。

「そんなはずないでしょう？」

老女とカリスマ・ミュージシャンの恋なんて、誰が見たって始まりようがない。

「オータ、ジョーカーを隠し持ってるから。いつだってそうなの、絶対、負ける戦はしないの、ハイハイホーなの。」

「……兵法、ですか？」

「ハイハイホー！」

ああ、なんて緊張感のない人なんですか！可愛いけど、可愛いけど……

「……そうだ、夏川さん。」

左ポケットに手を入れて、王子が取り出したのは高級感溢れる小箱。見たこともないセレブアイテムですが、なんとなく、中身は予想できます。アクセサリーでしょ、そうですね？

「俺が貴女に夢中な理由。お伝えしておかなくてははいけませんよね。」

そっと長い腕が夏川遠子に伸びて、優しく掌に握らせて……ジェントルですねえ、小僧なのに……

「女性を口説きなれているのねえ。それで、御婆さんにも挑戦してみたくなったの？」

受け取った遠子さんは、余裕の表情です。おそらく、数十年ぶりでしょうね、男性からアクセサリーを貰うなんて。

「まさか。口説いてまで手に入れたいと思える女性なんて、貴女の他には居ませんよ。」

かつ、格好いい～！ファンが聞いたら卒倒しますよ。惱殺ヴォイスで何てキザかつストレートな愛のセリフを吐いてくれてるんですか。こんな棺桶に入っていないのが不思議なくらいの老女に！……失言が過ぎました！

「行くぞ、かず。」

「ん。じゃねえ、トコさん、バイバイ！」

あ、佐倉さん、お疲れ様です。王子の通った跡に塩撒いておきましょう！

さて。それでも、気にはなりますよね、小箱の中身。何だったと思いますか？やっぱり、アクセサリーでしたよ、僕の読み通りです。ただ、そのモノが……おフランスの高級ジュエリーメーカーの、宝石を沢山使ったデザインリングで……正直、僕なんて名前すらピンこないような



セレブ御用達ブランドで・・・こっそりネットで調べたら、定価は僕の給料の二年半分でした。夏・冬のボーナス込みで、ですよ？どんだけ稼いでいるんでしょう、ミュージシャンって・・・こんなリングを告白の道具に使って、ダメだったらそのお金全部無駄になっちゃうんですからね。真面目に働いているのがアホらしくなります。そうそう、デザインリングだから、作品名がちゃんと付いているんですよ。日本語に訳すと・・・「一目惚れ」。くう！キザ！

キュートでポップな新曲『Ms. C』が、翌日の世間の話題を攫ったのは当然と言えば当然で・・・朝からずっと「SAKURAの冒険」なんて文字がニュースショーのエンタメコーナーに踊っています。話題性に事欠かないSAKURAをよそに、僕は今日も仕事のない遠子さんの遅い朝食を届けるため、てくてくと夏川邸へ向かっています。夏川遠子がもう数十年も愛して止まない老舗ベーカリーのクロワッサンが焼きあがるのと同時に買い、遠子さんにお届けする——毎朝の僕の仕事です。マネージャーというより、女王陛下の使用人みたいなものですよ、実際。

ん？なんでしょう、あの花屋のトラック・・・間が悪いなあ。今日、住込みの家政婦さんがお休みをとって実家に帰っているんですよ。夏川遠子は自らエントランスには出てきませんよ？ほらね、インターホンの前に佇んでいた配送員が、力なく踵を返しています。

「何か御用ですか？」

我ながら、間抜けな・・・用が無いはずはないですよ。何かって、配達に決まっていますよね。

「あ、こちらの御宅の方ですか？」

う～ん、違います。違いますが、ここは話を合わせておきましょう。

「そうですが。」

花屋のお兄さんが、上から下まで僕を見る。そうですよね、スーツ姿でパンの紙袋とアタッシュケースを提げてこんな時間に帰宅する奴って、普通はいませんよね。

「泉妻遠子さん充てに、御届け物です。」

ああ、そうなんです。夏川、は芸名なんですよ。本名は泉妻遠子。子役には「泉妻」という苗字が厳めしすぎるという理由で、デビューの際にうちの事務所で考えた結果、夏川となったと聞いています。

「ああ、お預かりします。」

「お持ちします。」

たたと軽快にトラックへ駆け寄り、荷台から取り出したのは一抱えもある、巨大な純白の薔薇の花束。

「白い薔薇ですか・・・こんなに沢山。」

「はい、サインをお願いします。」

「あ、はい・・・」

送り主は・・・「高良桜太」。高良王子じゃないですか。キザなアプローチを仕掛けてくるものですね。何ですか、これ。しかし、芸名の多いこの世界で、王子は完全に本名なんですね。まあ、セゾンのアイドル連中は皆、本名で活動していますが——事務所の方針なんでしょう。確かに、養成所の頃からファンが付くので、デビューで突然芸名が降って湧いても仕方がないでしょうが。それにしても、王子は一体どこで泉妻遠子の住所を調べたんでしょう。ちょっと怖いですね。まさか、ストーカー化したりして・・・いや、あんな黒オーラの色白イケメンがストーキ

ングしていたら目立ちすぎて仕方がないか・・・

「白い薔薇の花言葉、御存知ですか？」

配達ついでの立ち話で、ふと、そんな話題になる。

「いいえ。でも、薔薇ってあれでしょう、愛情とかじゃないんですか？」

「赤い薔薇は、真心の愛。黄色い薔薇は、愛の告白。そして白い薔薇は、崇敬や敬愛を表します。ヨーロッパでは聖母マリアの薔薇らしいですよ。」

純潔の女性、マリア。オールドミスの夏川遠子にぴったりのイメージですね。王子は本気で、うちの大看板に手を出すつもりなんではしょうか？面白半分で手を出されたら困るんですが、本気は本気で厄介です。そもそも、うちの夏川遠子とSAKURAの高良王子のツーショットなんて何一つしっくりくる点がないんですけど・・・花束を抱えて夏川邸に入ると、奥の部屋に人の気配。遠子さんです。おそらく、メイク中でいらっしやいます。あの歳になっても、絶対に人にスツピンを見せないんですよ。いや、勿論メイクルームでは一旦化粧を落としますが、その時にはメイクさん以外寄せ付けません。おそらく素顔も御婆さんなりに綺麗なんですけど、そこに線を引くのが昔気質の大和撫子なんですよね。そういえば、うちのひいお婆ちゃんも、僕に素顔見せたことなかったなあ。僕がもう、ホントに赤ん坊のころから「殿方には素顔を見せるものじゃない」なんて言って。あ、殿方ってフレーズ、遠子さんと一緒ですね。

「おはようございます、夏川さん。」

大きな声で挨拶をしながら、夏川さんがメイクルームから出てくるタイミングを計る。これも日課です。

「おはよう、アオくん。あら、素敵なお花ね。」

「今、ちょうどお花屋さんがいらしていましたよ。」

「とっても上品な香りね。」

小柄な遠子さんが抱きかかえると、花束はより一層大きく見えます。

「高良王子からですよ。先ほど、配達の方から教えていただいたんですが、花言葉は崇敬と憧憬らしいです。」

「まあ、王子くんはプレゼントも王子様みたいなものね。」

じっと、花束を見つめて、何かを数え始めて。遠子さんは何かにお気づきの御様子。

「小憎らしい子ね。」

セリフとは裏腹に、遠子さんは少し楽しそうに微笑んでいます。僕はコーヒーを淹れ、フルーツをカットし、遠子さんの朝食を準備しながら（だって家政婦さんがお休みなんです）、尋ねずにはられません。

「どうされました？」

「だって、このお花・・・ちょうど、私の歳の数だけあるのよ。こんなに豪華な花束になってしまうなんて、私、とっても御婆さんね。」

高良王子、やることがクサすぎます・・・イケメンじゃなかったら「キモい」なんて言われてしまうところですよ。イケメンってほんっとうに、それだけで得だなあ。

「夏川さん、お食事の準備ができました。」

家政婦さん、早く戻ってきて欲しいなあ・・・

それから毎日、王子から白い薔薇の花束が届くようになりました。とは言え、それで何かが変わったかといえば、夏川邸の花瓶をその薔薇が占めてしまっている程度で、僕の仕事も夏川遠子の暮らしも変わりありません。家政婦さんが帰ってきてくれて、僕の仕事量が元に戻ったというだけのことです。いつも通りクロワッサンを買わなくてははいけませんし、遠子さんの行くところ全てへ付いて行かなければいけません。他の女優さんに付いているマネージャーなら、こんなことはしなくて良いはずなんです。遠子さんの場合、マネージャーとは名ばかり、執事か付き人ってところですね。ちょっと萎えます。不思議ですよ、遠子さんのことは、結構好きなのに。いや、勿論、あのキザ王子のように、女性として好きだというわけではありません。あくまで、人として、人生の先輩として好感が持てるというわけですよ。今日は遠子さんの御供で、CDショップに来ています。遠子さんがお気に入りのピアニストの新作が出たので——と、いきなり女子高生の人だかりが出来ています・・・入口近くで迷惑な。はしゃいでますね、他人なんてお構いなしです・・・あ～あ、交代で写メなんて撮ってますよ・・・あれ、宣材パネルでしょ？パネルと写真撮って何が楽しいんだか。

「まあ、本当に人気者なのね、あの子たち。」

おお、遠子さんが微笑んでいます。流石、我らが夏川遠子、こんな小娘たちにイライラしたりなんかしません。僕も見習わないと・・・ん？あの子たち・・・？ちょっと失礼しますよ、遠子さん、僕にも見せて下さい——角度を変えて・・・っと、ああ、SAKURA！あのパネル、SAKURAじゃないですか。そりゃあそうですよね、この時期に特設平積みなんて、新曲を発表したばかりのSAKURAに決まっています。『Ms. C』でしょう。もう発売されていたんですね・・・後で買わなくちゃ。あ、発売日、今日ですか・・・それでこの人だかり。納得です。昼下がりに来て正解ですね、朝一は徹夜組で混んでいたでしょうし、夕方からは会社や学校の帰りに来る人で賑わいそうです——ちょっと待て、君たち学校はどうした！？

「行くわよ。」

そうですね、遠子さん。あの子たちに見つかるとうるさいです。しかし、全く意味不明な会話を繰り返していますね。ほとんど暗号だ。おそらく二人のルックスを褒めているんでしょう。何せイケメン高身長の色気男と、パネルさえもアイドル・オーラを放つ可愛気男です。もう少し、音楽についても触れてやれよと思いますが・・・セゾンにはセゾンなりのターゲット層がありますからね。

行きつけの店内でさえキョロキョロと迷う遠子さんを導いて着いたクラシックのコーナーは、うってかわって心落ち着く静けさ。買い物カゴ（持って歩くのは僕ですけどね）にお目当ての新譜を入れて、ああでもないこうでもない他のCDもチェックしている遠子さんの後ろに張り付いていると、若干眠くなります。夏川遠子には内緒ですよ？結局、クラシックを他に2枚、ジャズを5枚、ワールドミュージックを1枚、J-POPを2枚カゴに納め、遠子さんは「じゃあアオくん買っ

てきて。」とお決まりのセリフ。そうなんですよ、遠子さんは意外とポップスを聴くんです——は、いいんですけど・・・遠子さん、自分で買い物出来ないんですよ。子供の頃から一度も自分で買い物したことないんですよ。子役時代は大人が周りを固めていたわけですし、十代・二十代の頃はもう、今のアイドルなんて足下にも及ばない人気で、常に皆が注目していたので、自分で買い物することなんて出来なかったそうです。誰もが「夏川が何を選んで何を買うか」気にしていたんですね・・・今のようにご自身で買い物に出られるようになったのは三十も後半で、レジに並ぶという感覚がなくて大変な失敗をされたそうです。レジがトラウマになったその頃から定番になった、マネージャーにレジに行ってもらう習慣がそれから何十年と抜けず、財布はいつも僕が持たされていて、レジに行くのは必ず僕です。僕が付いて行かせてもらえない（なにせ「殿方」ですから）女性向けや高齢者向けの生活用品は家政婦さんが食材の買い出しと一緒に買ってくるようですし、下着は家にメーカーさんが作りに来ますし（家で採寸してのオーダーメイド！）、服はほとんど特別招待される展示会（セレブすぎてついていけません）で買っているようです。家政婦さんと一緒に買い物に出たりもするようですから、その時は家政婦さんが僕と同じ役回りなんでしょう。

「じゃあ、僕、お会計してきます。店内をまだ見て回られますか？」

「そうね。久々だから、もう少し見てみるわ。」

「分かりました。」

また会計後にまた買い物カゴが一杯、なんてことにならなきやいいけど・・・

会計を終わって戻ってみると、遠子さんの姿、なし。どこへ行かれたんでしょう、またクラシックに戻ったか・・・ん？あれ、DVDコーナー・・・遠子さんだ。隣に背の高いモッズ・ファッションの男子が居ますね、イマドキ流行らないでしょ、モッズ・・・でも若そうだな、「あえての」かな、だったらオシャレ男子だな・・・しかし、遠子さんに気づいてしまっていますかね？まだ気づかれていないなら、遠くから名前を呼ぶとバレてしまいますよね、折角のオフが台無しです・・・いや、ほぼ毎日オフですけど。

そっと距離を縮めて、夏川遠子を連れ出しましょう。それが一番です。そう決めて、背後にゆっくりと回り込み・・・むせそうになりました——ささささ**SAKURA**、高良王子！さっきのパネルの人じゃないですか！何やってるんですか、こんなところで！見つかったら大パニックですよ、ここ。店内から出られなくなったらどうするんですか！あの店頭の集団をどうやって越えて来たんでしょう、この神出鬼没王子は。っていうか、この二人・・・当然お互いのこと気づいて・・・ますよね、やっぱり。何を、話しているんでしょう、あんな平行に並んでお互いを見やることもなく。

「どうして減っていくの？」

「近づきたいんですよ、俺。夏川さんとの時間を。だから、本当は俺の歳から始めて夏川さんのところまで・・・と思っていたんですが、それだと、伝わらないかな、なんて——俺の歳なんて、御存知ないでしょうから。だから、知って頂けたら黄色い薔薇を準備しようかと思っています。」

「あら、フランスの伊達男みたいな演出をするのね。最初に私の歳の数と同じ白い薔薇を贈っておいて、日毎に一本ずつ本数を減らして。でも正解ね、貴方が幾つか、確かに分からないわ。貴方の歳まで減ったら、薔薇の色を変えてまた私の歳の数に戻すの？」

減って・・・ましたっけ？僕は全然、気づきませんでした。

「それも良いかもしれませんがね。でも、黄色の出番は少ない方が嬉しいです。俺、深草の少将を演じるつもりはありませんよ。」

不覚って何が？証書・・・って何でしょう？

「あら、根気が無いのね。贈り物には困らないのじゃなくて？薔薇も最近は色々な色があるんでしょう？」

「そうですね。でも、俺と、夏川さんの間に必要なのは三色ですよ。」

「白と黄色と・・・次はなあに？」

「俺の手の内、全部晒せとおっしゃるんですか？」

「いいじゃないの。王子くんがそこまで耐えられるかどうかもわからないし、聞いておけばドロップアウトされても気にならなくて済むもの。」

「・・・しませんよ。楽しみにして下さって結構です。理由はどうあれ、気にかけていただけるなら光栄です。秘してこそ花ですしね。」

ヒシテコソ・・・???大変です、どうしましょう、僕、もしかして会話についていていませんよね???何ですか、それ。僕、もしかして白王子と同レベルですか???

「本当に変わった子ね、王子くんって。面白いわ。」

「変わった子、ですか。埋まりませんね、なかなか、その溝が。夏川さんにとって、指輪を贈ろうと花束を贈ろうと、俺は子供に過ぎない、か。俺、他に贈れるものがあるでしょうか・・・

・曲・・・曲はどうです？俺に出来ることは、それくらいしかないから。」

ミュージシャンってスゴイ・・・そんなの、限られた人にしか贈れない特別ギフトでしょうよ。それくらいって・・・それくらいって・・・

「あら、モノで釣れると思っていたの？」

おお。大人の女ですね、いや、大人を一周終えていますけど・・・スイマセン。

「まさか。でも、俺が贈ったものを日々目にして、俺を気にかけて頂く時間が増えれば、俺もスタートラインに立てるかもしれないでしょう？」

「策士ね、王子様。」

「有難うございます。」

え、今褒めてました・・・？

「でも、小手先だわ。」

「俺、溺れています？」

「狸の泥船に乗っているみたいに。」

あ、遠子さんが微笑んでいる・・・

「じゃあせめて、火は、つける側に回りたいですね。」

あ、黒王子も微笑んでいる・・・さっぱりです、僕は。よくあの遠子さんと同じテンポで会話し

ていますね。僕だったら既に何度か会話の途中で立ち止まって方向性を指さし確認していますよ。天然の白王子相手に毎日鍛えているからでしょうか。でも、僕だって毎日夏川遠子と話していますよ？

「もう十分、つけて回っているのじゃなくて？入口は大変だったわ。」

「夏川さんが話されていたのと同じことですよ。あれは、俺がつけた火に焼かれているわけじゃない。勿論、ファンは大切です。でも、それとこれとはまた別の話でしょう？SAKURAのファンは、俺を『高良王子』と呼びますが———実際の俺は王子ではないし、持ち上げられているほどのカリスマでもない。従姉妹が勝手に事務所に応募して、養成所の合格通知を持ってきたんです———皆が期待するほど、俺は仕事に前向きな男じゃありません。俺は芸能界というところを覗けば『夏川遠子』を垣間見られるかもしれないという不純な動機で養成所に入った、カリスマとは程遠い追っかけですよ。」

驚愕の新証言じゃないですか、何ですか、そんなに長らくファンなんですか？じゃあ、夏川遠子が存在しなければ、SAKURAも存在しないってことですよ？遠子さん、僕は今、貴方を誇りに感じています。

「きっかけがどうあれ、今の王子くんは、それだけで仕事をしているわけではないでしょ？それくらいはまだ、聞き分けられるわよ、この御婆さんの耳でも。」

「音楽は好きですから。でも、仕事より貴女が優先です。」

「ファンが怒るわ。」

「俺のファンは、怒りませんよ。」

———怒りますよ！

「意地悪な質問、してみようかしら。」

「何です？」

「仕事と私なら、私なのよね？」

「ええ。」

「音楽と私なら？」

うわあ、ウザい若い女の子みたいな事尋ねてますよ、あの女優が！

「その比較は、無意味ですよ。」

王子の顔が、遠子さんの方を向く。

「貴女が、俺の音楽だから。」

遠子さんが、振り向き———

「貴女の為に音楽を捨てたとしても、貴女を想えば、それだけで音楽は生まれる。」

見つめ合う、美男と老女。

「何度でも、貴女を、選びますよ。でも、音楽は何度でも付いてくる。永遠に、貴女と共に付いてくる。その比較は無意味です。」

いいいい、イケメンすぎるでしょ、少女漫画の王子様でしょ、そうでしょアナタ。ちくしょう、モッズも似合うし。

「あら、アオくん。どうしたの？そんなところでポーっとして。」

いいいい、今ですか、このタイミングですか、僕に気づくの。気まずいでしょ、ほら、切れ長の凛々しい目が睨んでますって・・・怖い、端正な顔で睨まれると、凄みのあるオッサンよりずっと怖い・・・

「いえ、その、あの、個人的な買い物を済ませたくて、悩んでいまして・・・」

「あら、欲しいCDがあったの？買っていらっしやいな。アオくんはどんな曲が最近の一押し？」

「いえ、あの、その、大変・・・申し上げ難いのですが・・・入口のところの・・・SAKURAの、いえ、あの、SAKURAさんの・・・」

「ああ、俺たちのシングル、買って下さるんですか？嬉しいな。」

目が、笑ってないです・・・

「アオくんは、佐倉ちゃんの声が好きなのよね？」

「ええ。それに、その、音楽性も・・・」

好きです、好きです、王子の作る楽曲もリリックも好きです、ホントです、だからじつとこっちを見ないで下さい！

「本当なのよ、アオくんたら、可笑しいの。番組でご一緒する前から貴方たちの出しているものは全部持っていたくらい好きなのに、お会いした途端に急にあの王子様は要注意ですなんて言いだして・・・それまで聞いている方が飽きるくらい音楽の細かいところまでずっと褒めていたのに。」

あわわわわわ！

「成程。仕事熱心なんですね、青井さんは。」

ああああ、目が、目が鋭すぎます、違います、音楽は好きですって、ホントですって、でもほら、モモンガが、モモンガ騒動がですね・・・！

「はあ、まあ、その・・・」

何でだ、言いたいことが何も口から出てこない。凄まじい威圧感です、王子。流石は俺様高良様・・・でも、こんなところで本領発揮しないで下さい、僕はしががないサラリーマンです・・・

「もしもし。」

何故、いきなり携帯・・・

「夏川さんのところに、『Ms. C』を一枚送っておいてくれ・・・ああ・・・いや、違うよ・・・ああ、そんなところだ・・・煩いな、黙れ・・・ああ・・・じゃあ、宜しく。」

電話の向こうは・・・スタッフさん???は、いない筈・・・まさか佐倉さん???

「長年のご愛顧に感謝して、贈呈致しますよ、青井さん。御住所がわからないので、一応会社の方へ、夏川さん充てに届くように手配していますので。」

おお、営業マン戻って来たれり！ちょっとビビったじゃないですか。いい人だ、実はいい人だこの黒王子。

「有難うございます！」



## SAKURAが出来るまで

---

届きました、『Ms. C』。しかも、デビュー五周年記念付録つき初回限定盤！デビュー五周年記念って何だと思ったら、SAKURA結成時からメジャーデビューまでの雑誌の記事がそのままコピーされて小冊子になって入っているだけでしたが。まあ、養成所時代を知らない、僕のようなファンがほとんどですからね、なかなか面白い企画かもしれません。

『脱アイドル宣言プロジェクト・チームSAKURA始動！SAKURAのつぼみ、咲いちゃう？』

言わずと知れたアイドルの宝庫セゾン・プロが、なんと、脱アイドル宣言！研修生の中でも人気・実力ともにトップクラスの二人、佐倉和磨クンと高良桜太クンを、アイドルとしてではなくアーティストとしてデビューさせちゃおうという仰天プロジェクトを進めていることが本誌の取材で明らかになったゾ。思い切って、二人を直撃だ！

おはようございます。すごい噂になってますケド？

佐倉：何が？

高良：お早うございます。

高良クンはいつも礼儀正しい。佐倉クンは元気一杯。

なんだか、二人でユニットを組むことになったトカ。

佐倉：うん！

おっと、佐倉クン、いきなり認めちゃいました。

高良：ユニットは確かに組みますが、即デビューというわけではないんです。養成所を卒業することになって・・・

なんと、爆弾発言！デビューしないのに卒業って、ファンみんながビックリしちゃうんじゃないの？

高良：説明が難しいんですが、養成所の中ではやりづらい、実験的なことを少しやってみようという話になって。それなら卒業してちょっと養成所から距離をとろうか、と。でも、あくまで実験的なことをやるために養成所を離れるわけで、色々なことに挑戦するにあたって勿論事務所の力も借りなくちゃならないし、この挑戦自体を事務所が後押ししてくれているので、事務所を離れるということは無いです。

ファンみんな、一安心だね！

でも、卒業っていうことは、デビューっていうことじゃないの？

高良：新しいことを始めてみよう、という第一歩を踏み出した段階です。今はまだ、デビューということは視野に入れていません。本格的にアーティストとして皆さんに提示出来るレベルのものがあるわけではないので。

実験的な新しいことって、どんなこと？

高良：事務所の組織上の実験でもあり、個人的には音楽に対しての新しい挑戦でもあります。事務所のことは一先ず置いておいて、音楽に関して養成所での研修とはアプローチの仕方を変えて行こうという意気込みだけは強くありますね。内容は・・・話しませんよ。

えーっ、秘密主義なの？佐倉くん助けて！

佐倉：難しいことは、オータに任せてるから、秘密とかよく分からないや。実験とか言われてもピンとこないし。ただ、養成所を出て、これからはオータと二人なんだなっていう感覚はすっごくあるんだ。事務所の人とか、勿論変わらないんだけど。なんていうのかな、見える景色が、今までとちょっと違うの。同じところで、同じことしてても、「あー、オータと二人ぼっちになっちゃったんだ」ってやっぱり思う。寂しいわけじゃなくて、悲しいわけじゃなくて、なんか、しっかりしなきゃって感じ。でも、今までよりずっと自由なの。養成所にいると、後輩のためにとか、先輩のためにとか、先生がこう言うからとか、色々あるじゃない？それが嫌ってわけじゃないし、苦しいってことも全然ないんだけど、でも、それって俺のやりたいことかなって・・・でも、俺、こんなだから、誰かが居てくれなきゃすぐサボったりして自分に甘くなっちゃうでしょ？オータとだと、自由にさせてもらえる。なんでも聞いてくれるし、分かろうとしてくれる。でも、オータが俺のこと見張ってると思ったら、ぜんっぜん手なんか抜けないし、オータが頑張ってるんだったら、俺はそれ以上に頑張りたいって思う。オータ怖いし。

高良：見張ってなんかいらないぞ。人聞きの悪い事言うなよ。

佐倉：ほらあ、怖いのに！

なんかもう、息ピツタリ？

ユニットは、どちらが言い出したの？

佐倉：多分、どっちでもないんじゃないの？あ、河原さんかも。

河原さん？

高良：養成所の先輩だった方で、今はParadise Callさんのマネージャーをされています。

佐倉：もう、俺、そろそろ事務所辞めようかと思ってて。歌うのも踊るのも大好きだけど、なんか全部メンドクサクなっちゃって。だって、歌ったり踊ったりしたいだけだったら、別に養成所に居なくても出来るもん。入った頃はもっと上手くなりたくてしょうがなかったから、何があっても養成所は好きだったんだけど、なんかね、別にそこまで上手になる必要もね、ないかなって・・・好きだからやってるだけなのに、メンドクサイことイッパイやらされて、好きなようにはやらせてもらえないし・・・じゃあ、別にもういいやって。そしたらね、社長が、デビューの話が決まりかけているからそんなこと言うなって。一応、メンバー構成とか役割分担とか、色々事務所とも他の研修生とも話し合ったんだけど、結局うまくいかなくて。なんか、コンセプトとかっていうの？あれが多分、合わなかったんだと思うんだ。それで、やだって言ったの。社長に。デビューはしないですって。そしたら、河原さんがね、じゃあ、アイドル・デビューしないでいいから、事務所辞めるのはやめなさいって言うの。「辞めるって言う前に高良桜太のところに行ってみようか」って。

高良：河原さんにはビックリしたな。俺も事務所、辞めようとしていたから、正直、養成所には暫く顔を出してなくて・・・そうしたら突然、河原さんが和磨を連れて来たんです。「養成所

の枠を超えて好きな事やっていいように段取り組んできたから、そのかわり佐倉ちゃん連れて行って」って。

二人とも辞めるつもりだったの？ファンの人、その河原さんに大感謝だね！二人とも、その時初めて会ったの？

佐倉：ううん。オータのことは知ってた。すっごいイケメンだし、養成所でも目立ってたから。仕事もいくつか一緒にやったと思う、絡みはなかったけど。でも、ちゃんと話したことは全然なくて、その時初めてだったよね？

高良：そうだな。勿論、知ってはいましたよ。養成所では、ダンスを勉強したかったら佐倉先輩のバックで練習しろって言われていたくらいの有名人でしたから。歌と踊りのセンスはもう、社長の折り紙つきです。ただ、自由というか、自分勝手というか、養成所のルールを無視するくらいは当時からありましたね。しかも、破っても何故か許されるという・・・そのあたりは少し羨ましかったかな。

そっか、佐倉クンが先輩なんだ？

佐倉：二個上です！

高良：養成所の入所も和磨が五年先輩です。

佐倉：なのに、もう呼び捨てなの！最近コンビになったばかりなのに！ぷんぷんだよねえ？

いやあ、高良クンの方がしっかりして見えちゃうんだけど・・・？

佐倉：ひどっ。

ユニット名の**SAKURA**って、どうやってつけたの？

高良：命名は社長なんです。佐倉和磨のサクラっていう音と、高良桜太に入っている桜という字の訓読みが一緒だということで**SAKURA**になったようです。

二人の名前が入っているってことね？

高良：そうですね。

二人の活躍を待っているファンも多いと思うんだけど、本当にデビューはないの？

佐倉：ん、わかんない。全部、オータに任せてるから。**SAKURA**って、結局オータに決定権あるの。事務所じゃなくて。そりゃ、社長が嫌がるようなことは出来ないけど、結構何でもありなんだって。そのかわり、オータが何でもやるの。スタッフがついてなくて、オータがスタッフも兼ねるの。だから、オータがデビューしたくなったらするんじゃないかな。

佐倉クンはデビューしたくないの？

佐倉：だって、辞めるとこだったし。あんまり考えないよ、そんなの。河原さんが言うにはね、オータが預かってくれなかったら本当に辞めさせようと思ってたんだって。

高良：俺は託児所かよ。

佐倉：タクジショって、なんの辞書？

(笑) 佐倉クンは高良クンがデビューだって言ったらOKするの？

佐倉：うん。俺のことはね、オータが好きにしてくれればいいんだ。だって、俺、河原さんに言われてオータに逢いに行った時にね、決めたんだ。オータに任せようって。オータについてこうって。俺、好き嫌いが激しいとかみんなに言われるけど、そんなことないと思うんだけど、でも

、オータは好きだよ。俺の声のことを、まるで楽器のことを話してみたいに話すの。新鮮だったなあ。任せられるって思った。オータが歌えっていう歌なら歌おうって。たとえそれが、俺が苦手だと思ってるジャンルの歌でもね、オータが俺に歌えっていう時は、勝算があるんだ。歌ってみたら、すごくハマったりする。音に対する感覚っていうの？オータは抜群なんだ。オータのセンスは信じられる。俺を歌を売るための道具だなんて言わない。絶対言わない。俺を、「良い歌い手だ」って言ってくれた。だからね、オータがやるっていうならやるし、やらないっていうならやらない。

なんか、絶大な信頼があるみたいだけど（笑）、高良くんはデビューについてどう思ってるの？本当に高良くんが決定権持っていたりするの（笑）？

高良：可笑しいですか？でも、事務所のシステムから離れた実験体なので、決定権が自分たちにあるというのは本当です。ただ、デビューに関しては、自分たちがしたいと言えば出来るかという、そういうわけではありませんから。そういう状況に恵まれて、納得のいくやり方で和磨の歌を多くの皆さんに聴いて頂けるとしたら、幸せなことだと思いますね。

佐倉くんの歌？高良くんは歌わないの？本当にスタッフになってしまうの？

高良：コーラスに参加することになるかもしれないですね。うち、人使い粗いし。なにしろ、二人しかいませんから、俺たち。

佐倉くんをメインヴォーカルにしたデュオっていうスタイルなのかな？

高良：いいですね、それ。採用しますよ。

なんだか、謎がいっぱいなSAKURAの二人。実験って、いったいどういうことなの？二人がデビューの決断をしてくれるのはいつ？二人の今後、目が離せないゾ！

なんていうか、この取材のノリに付いて行けない自分がいますが、二人とも若いですね。でも、もう面影はぼつちりです。王子なんて顔がほぼ完成しているじゃないですか。まだちょっとお色気は足りてないですけど。佐倉さんは可愛いですね。本当にびっくりするくらい幼く見えます。顔のつくりは今と同じなのに、断然幼いですよ。当然と言えば当然ですが。

## 『セゾンの異端児SAKURA、インディーズでラジオ・ジャック』

アイドル専門と言われてきたセゾン・プロダクションが、実験ユニットという位置づけで一年がかりで準備を進めてきたデュオがある。脱アイドルを目指すという異端児たちのユニット名は「SAKURA」。養成所時代から人気を誇ったSAKURAを、あえてアイドルとしてデビューさせないという思い切った賭けに出たセゾンに勝算はあるのか。事務所関係者は、本誌の取材にこう答えた。

「男性アイドル専門、と思われていますが、実際のセゾンには女性アイドルも所属しているし、俳優もいれば声優もいる。大々的に脱アイドルを謳ったユニットを世に出すことで、事務所とし

てのふり幅をもう少し皆様知って頂くことを目指して決断した実験ユニットです。ただ、正直これは、あとづけの理由にすぎません。SAKURAに関しては、そういう事務所の思惑とは別に、本人たちの自己主張の強さということが大きく反映しています。アイドルとして、表現者として、皆様の前へ出て、ファンの皆様に少しでも笑顔になって頂きたい——それが今までの研修生の大半でした。でも、SAKURAは研修生の頃から、表現者としてより、作り手側として音楽や映像に携わりたいという感情を強く持っていた。じゃあ、その路線で少し、やってみなさいよと……そういう意味で実験ユニットなんですよ、SAKURAは。だから、養成所から離して準備期間を置いたんです。アイドルとしてではなく、ソングライティングを自ら行うミュージシャンとして自分たちは歩きたいんだという意思表示ですね。この実験が決まるまでは、調整は難航しました。事務所側としては、アイドルとしてデビューさせたかったというのが本音です。彼らは、アイドルとして多くの皆様の心の支えになることが出来る逸材だと今でも我々は信じています。音楽を作るのも、振付を考えるのも、歌うのも踊るのも、どれもアイドルとしても出来ることです。それをわざわざメディアへの露出を控えたり、プロモーションの予算が極端に少なくしか取れなかったり、そんな勿体ない事をしてまでアイドルではないことにこだわる必要はない。けれども、アイドルでは出来ないことがあることもまた事実ですね。例えば、公序良俗を脅かすような挑発的な歌詞はいけないとか、楽曲は万人に聴き易く分かり易いものである必要があるとか。誰がどう見てもアイドルのような容姿のSAKURAがあえてそこを破っていくとしたら、それはそれで商業音楽の世界に一石を投じるのではないかと……この事務所内での葛藤が、SAKURAという脱アイドル宣言ユニットに凝縮されています。」

事務所内での葛藤の末に誕生した、脱アイドル・プロジェクト「SAKURA」。このSAKURAは、佐倉和磨、高良桜太という男性二人によるユニットだ。その二人が実験第一弾として投下したのが、セゾン・プロ創立以来初というインディーズでのミニアルバム作成という爆弾だった。限定千枚。それをほとんど市販せず、全国の主要ラジオ局に送り、体当たりの営業をかけた。徐々にラジオDJたちに取り上げられるようになったSAKURAの楽曲。番組で使われるやいなやリスナーから問い合わせの嵐。アルバムが手に入らない為にリクエストが殺到、今やラジオ・ジャックの様相を呈している。その営業マンが、SAKURAの高良桜太その人だ。アルバム収録曲の全てにおいて作詞・作曲・編曲を一人で手掛けたこのプロデューサーに、直撃した。

——ラジオ・ジャックと言われているこの人気の急騰を、どう思われますか？

「沢山の楽曲を耳にする時代です、その中でSAKURAの音楽をリクエストして下さる方が増えているというのは、単純に嬉しいですよ。」

——最初からラジオ局へ営業をかけていたわけでしょう？予定通りのSAKURAフィーバーなんじゃないですか？

「そんなことはないですよ。勿論、聴いて頂く為に作っている音楽ですから、自信がないモノを提示している訳ではありません。ですが、このミニアルバムに関しては、耳の肥えたラジオDJや音楽番組のリスナーの方にSAKURAがどう受け止められるか、ということ一度肌で感じたくて出したプロトタイプ盤なんです。養成所に居た頃は先輩のコピーをひたすらやってただけで、勿論それも大事な事ですが、オリジナルの楽曲を聴いて頂く機会はなかったですし、離れてから

もどうしても相方の容姿が目立つ（注：佐倉和磨は研修生当時、固定のファンクラブがあったほど人気だった。現在は解散）ので路上ライブで反応を見るという訳にもいかず・・・正直、自分達の曲がどういう風に受け止められるのか、全く予想がつきませんでした。」

——自分達の、と先ほどからおっしゃっていますが、今回の楽曲は全て高良さんが手がけたものですよ？

「SAKURAは、かず（佐倉和磨）がヴォーカルで俺が曲を手掛けるというスタイルのユニットです。今後の展開はまだ分かりませんが、現状は、そうですね。でも、歌ってもらわないと始まりませんから、俺の曲、という意識はありません。SAKURAの曲、という感じですね。」

——ヴォーカルがあって完成する、と？

「勿論です。かずは、稀有の声を持っていると思いますよ。だから、あの声でメロディーラインを歌うことを前提に、全てのアレンジを落とし込んで作っています。」

——計算しつくされた楽曲構成、というわけですね。今回のラジオ・ジャックで、メジャーデビューをという話が早くも出ているようですが？

「有難いお話ですよ。今、事務所と相談してレーベルを作っているところです。」

——事務所のレーベルや既存の別レーベルからというわけではなくて？

「プロトタイプのために、インディーズレーベルを作ったので・・・折角だから、これをきちんと会社にしよう、という話になっています。法律や経理のことが俺たちにはわからないので、そこには事務所の力を借りなくてははいけません。専属スタッフがいない、という話題をよく振られるんですが、実験ユニットなんだから当たり前です。事務所と一線を画している訳ではありません。」

——SAKURA専門のレーベルを新たに立ち上げて、そこから始動するということですか？それは、今回相当な手応えを感じたから？

「手応えは、無かったといえば嘘になります。でも、レーベルは、元々から実験案の一つには上がっていたんです。事務所が脱アイドル宣言を出しましたよね？じゃあ、アイドルの為にノウハウを構築してきた事務所のレーベルに甘えて船出していいのか、という疑問が常に付いて回っていて。それで、実験組には実験組のレーベルを、ということになっています。勿論、小規模ですよ。インディーズと何も変わらない。でも、それでいいと思っています。SAKURAのスケジュールを切ったり、曲を作りこんだりすることは自分達でも出来ますが、音源を管理したり、税金を計算したりなんてとても自分たちの手には負えない。そこはやっぱり、誰かの力を借りなくてははいけません。レーベルが、専属スタッフのいないSAKURAのホームになってくれるはずですよ。」

——専属レーベルを作ったの出発に不安はありませんか？

「確かに、自分たちがコケればレーベルもコケますからね。不安がないとは言いきれませんが、規模も小さな会社ですし、スタッフも他に正規の仕事のある人ばかりですから、そのあたりは心配していません。むしろ、伸び伸びとやらせてもらえると考えています。」

——メジャーデビューはいつごろになりそうですか？

「レーベルもそうですが、曲も作らなくてははいけませんし、デビューにはタイミングも大事です。」

から、なかなか期日を決めるのは難しいですね。まだ準備中としか、言えませんよ。とりあえず、今のインディーズレーベルで活動を続けながら、堅実に進めていきたいと思っています。」

そう語る高良桜太の顔は、自信に満ちている。セゾンの隠し玉的存在だった高良は、矢張り美形。その彼が目立つと言うヴォーカル、佐倉和磨にも会いに行ってみた。アイドルとしても一世を風靡できそうなルックス。セゾン・プロの男性アイドルの王道を行く外見からは、ラジオで馴染んだあの強烈な歌声が連想できない。

———SAKURAの曲をラジオで聞かない時間はないとまで言われています。この人気はどう思われますか？

「人気とか、ラジオとか、よく分からないけど、オータ（高良桜太）の曲は好きだよ。ちょっと、ん？てなる曲を持ってきた時も、仕上がりを聴くとビックリするくらい面白い曲になってたりする。だから、俺、オータの曲のファンなの。皆も好きだと嬉しいし、皆が好きだと思う。」

———ヴォーカルとして、SAKURAの楽曲に自信があるんですね。

「うん。だってオータだから。」

———高良さんに絶対の信頼があるようですね。それはヴォーカルとして音楽プロデューサーにたいする信頼？それともユニットの仲間としての信頼？

「オータは、オータ。でしょ？」

———どちらとも決められないということでしょうか？SAKURAの楽曲は、佐倉さんの圧倒的なヴォーカルがあつてこそと思いますが、歌うことに目覚めたのはいつごろですか？

「普通だよ。皆小さいころから、歌くらい歌うでしょ？変わらないよ、そんなの。でも、歌と踊りと、ちゃんとやりはじめたのは、やっぱり養成所に入ってからかなあ。いつも歌って踊って———オータは、あんまりどっちも好きじゃないみたいだけど。俺は好き。歌うのも、踊るのも。それがオータの曲なら尚更、楽しいし、やりがいあるよ。」

———養成所では、ヴォーカルとして期待の星だったんじゃないですか？

「ん、分からない。多分、歌よりダンスの方が褒められてた気がするけど。でも、アイドルとしてデビューするって話はあつたよ。でも、ダメだった。なんか、話を聞いてるうちにね、もうヤダってなっちゃって・・・そんなの無理だって、なっちゃって。辞めるって、事務所に言ったんだ。そしたら、声が勿体ないとか、踊りだけでも極めたらどうだとか、周りは勝手なことばかり。でも俺、やっていけないと思ったんだ。実力がないからとか、そんなことじゃなくて、息が、できなくなりそうで。そしたら、歌えなくなりそうで。踊れなくなりそうで。やる気なんてちっとも出なくて。このままダメになるぞって言われたけど、それでいいやって思ってた。ダメでいいやって。そしたら、オータに会いに行かされたんだ。オータが組んでくれなかったら、俺はあの時、ホントに辞めてた。事務所は俺の歌は売れるって言ってた。でも、俺、そんな風に言われるのはイヤだったんだ。オータは、売れるとか売れないとかじゃなくて、俺の声を、歌を、ちゃんと見てくれる。ダメ出しもするし、難しい曲でイジメたりもする。でも、俺の声を大事にしてくれるし、必要だって言ってくれる。オータの音楽の芯になる声だって。本物の声だって。二人で、音楽を作ろうって。難しいことはよく分からないけど、嬉しかったから。俺の声を使わんじゃなくて、俺の声と一緒に何かを作ってくれるっていうことが、嬉しかったから。ヴォー

カルとして期待されるって、多分そういうことでしょ？ホントに期待してくれてるのは、養成所より事務所より、オータだよ。」

——プロデューサーと歌手との、相思相愛の関係ですね。今後も良い音楽を期待しています。メジャーデビューに向けての意気込みを聞かせて下さい。

「わかんない。そういうの、全部オータに任せてるから。デビューにはあんまり興味がなくて。それより、そういう大きなことを仕掛けるためにオータが作る曲がどんな曲になるのか、そっちのが楽しみで。だってさ、絶対良い曲ができるよ？」

——メジャーデビューに、自信ありだと？

「売れるかどうかなんて自信ないけど。でも、良い曲になる自信はある。トーゼンでしょ？」

茶目っ気たっぷりに笑って見せる佐倉和磨の顔は、言葉通りの自信に満ちていた。高良の自信あり気な表情がオーバーラップする。この二人、とんでもないデビュー曲を練っているのかもしれない。

なんというか、六年前も今と変わらず佐倉さんは自由ですね。感覚的なのかな、高良さんより。普通、コンポーザーの方が感覚的なんじゃないかと思ってしまいますが、**SAKURA**は逆なんですよね。それにしても、高良さん、営業もやってたのか。王子にしか見えない顔なのに、結構苦勞してるんですね。いや、確かにオーラ**OFF**の時は営業マンみたいに見えますけど。天下のセゾンですよ？アイドルやってれば、そんなことしなくてもデビュー曲の宣伝バンバン打ってもらえたのに。勿体ない。ホントに無いんですかね、経費。それとも話題作りかな。確かに話題になりましたしね。ここから一年のインディーズ時代に突入。ミニアルバムを通常のインディーズの販路で三枚出して、そのどれもがインディーズとしては異例の、メジャーを抑えての月間売上枚数トップテン入りを果たし・・・インディーズ最後となった三枚目は、今でも破られていないインディーズとしての歴代最高の売上枚数を叩き出したわけで・・・

『インディーズがメジャーを制する日 社会現象となった**SAKURA**、ついにインディーズ歴代最高枚数を売上！』

衝撃のラジオ・ジャック（注1）から約一年、その間三枚のミニアルバムを発表したインディーズのデュオ**SAKURA**が今、音楽シーンの話題を独占している。大手事務所に所属しながら、事務所の専属レーベルからのデビューを蹴ってインディーズでの活動を続けてきた**SAKURA**。そのメンバーである高良桜太氏に話を聞いた（メインヴォーカル佐倉和磨氏はダンス留学中とのことで、会うことは出来なかった）。

（注1）・・・**SAKURA**が最初に世に出したのは、プロトタイプ盤と呼ばれた限定千枚のミニアルバム。全国のラジオ局でヘビーローテーション・チューンとして使用され、ラジオ・ジャックと言われた。このラジオ・ジャックで一気に知名度を上げた**SKURA**は、以後「出せば売れる」



と言われるまでの人気者に。

オリジナルを追求する**SAKURA**の楽曲は、メジャーの多くのCD・シングルを抑え、一枚のミニアルバムに二ヶ月・三ヶ月とかけながら月間売上ランキングのトップテンに食い込むロングヒットを飛ばしてきた。そして最新のミニアルバムではついにインディーズの歴代最高枚数を売上。曲を発表する度に新しい一面を見せる**SAKURA**には、既に都市伝説にも似た噂さえ囁かれている。曰く、ソングライター「高良桜太」は個人名ではなくグループ名だ、であるとか、**SAKURA**は実は某アイドル・グループの裏の顔だ、であるとか、デュオとは偽りで実はバンドだ、であるとか。

——巷では高良さんの正体が色々な憶測をよんでいるようですが。

「俺の正体？何ですか、それ。逃げも隠れもしませんよ。そんなに不審な人物だとは自分では思っていないんですが・・・正体を隠したくても、養成所時代（セゾン・プロダクションの男性アイドル養成所。**SAKURA**の二人はどちらもこの養成所で研鑽を積んだ）に随分色々な媒体を経験させて頂いていますし・・・ちょっと無理がありますね。中学生の頃から知ってくださっている方もいらっしゃるわけで・・・今更ですね。」

そう、勿論**SAKURA**はデュオだ。ヴォーカルの佐倉和磨とコーラスの高良桜太。そして高良桜太が作詞作曲を手掛けている。

——発表される楽曲が幅広いジャンルを行き来するので、高良さんが個人で作っているのではなく、「高良桜太」というグループなのではないかという・・・

「ジャンルなんて、あまり興味がなくて・・・自分の好きな音を作っているだけです。確かに、アルバムの構成にはそれなりに気を使っていますが・・・同じ曲調の曲が集中しないようにだとか・・・でも、それは誰もが当然考えることで・・・俺が特別だとは思いません。音楽って、細分化してもしきれないところがありませんか？クラシックとロックの境目さえ曖昧な時代なのに、**SAKURA**の音楽はこのジャンルだと固定してしまいたくない。俺自身が色々なジャンルの曲を聴き、演奏してきたので、それは俺の中で曲作りに影響を与えているかもしれません。確かに、歌いづらい曲もあるみたいですけどね。」

——それは、佐倉さんが「歌いづらい」と？

「ええ。歌唱力には問題が無くても、器用な方じゃないので、初見では感覚が掴みづらいことがあるみたいですね。感覚派なので、初見でサラっと歌いこなせないと『歌いづらい歌』だと思ってしまうみたいです。最も、歌えないということではなくて、本人が納得するクオリティに到達するまでに『歌いやすい』曲より何回か多く歌いこまないといけないというだけなんです。歌うより、振付を考えるのが大変だと聞いています。曲調によって違う引き出しが必要になるみたいです。」

あまり知られていないが、**SAKURA**は歌いながら踊り、踊りながら歌う。振付は養成所時代からダンスに定評のあった佐倉和磨が担当。先日、インディーズ売上記録が認められ歌番組にゲスト出演した際、彼らのパフォーマンスを目にした方もいらっしゃるのではないだろうか。

——ダンスには正直、驚きました。音源だけだと、まさか歌って踊っているなんて思いもよらず・・・

「皆さんそう言われますが、自分たちでは意外性を演出したつもりは全くなくて・・・むしろ、自然な流れでした。かず（佐倉和磨）のダンスは、SAKURA結成前から既に色々な方に評価して頂いて・・・それを封印するのは余りにも勿体無いという事が第一、第二に・・・養成所で育った俺たちには染み付いているんですよ、ダンスヴォーカル・スタイルのパフォーマンスが。」

なるほど、そう説明されると納得がいく。セゾン・プロの養成所で培われた「歌」と「踊り」に、二人独自の「創造性」を合わせて、SAKURAはどこへ向かうのだろう。

——遅くなりましたが、インディーズ売上枚数の歴代最高記録、おめでとうございます。「ありがとうございます。メジャーのCDと違って、手に入れるのは簡単ではないはずなのに、それだけの方に手にとって頂けたことに感謝しかありません。」

——あのラジオ・ジャックの時からメジャーデビューの話があったようですが、いよいよ現実味を帯びてきたんじゃないですか？

「あの頃から、ゆっくりとですが、レーベルの体制を整えて来たことは事実です。事務所との調整もほぼ片付きそうですし、あとは機会があれば・・・というところですね。」

——ちなみに、あのラジオ・ジャックの時にも、インディーズのラジオ・リクエスト最多記録を作られたそうですが、メジャーデビューということになれば、また記録を狙っていかれますか？

「リクエスト記録？そうなんですか？初耳です。皆さん有難うございます。それ、嬉しいな・・・記録を狙ってデビューしようとは思いません。かずも同じことを言うと思いますよ。」

——メンバーとしてはそうかもしれませんが、高良さんの場合、プロデューサーでもあるわけですよね。デビューに向けての戦略はどう考えていらっしゃいますか？

「なるほど、そうきましたか。そうですね、メンバーとしてはただ、自分たちの曲をより多くの人に知っていただける機会が増えるなら嬉しいという程度ですよ。自分たちがやってきたことをいきなり変えられるわけではないし、メジャーへ移るからといって変えようとは思わない。かずの声を信じているから、聞いてさえ貰えれば分かって貰えると思っていて・・・正直、俺はパフォーマンス全般において脇役なので、結構気楽です。メジャーデビューでプレッシャーを感じるとしたら、表舞台で注目を浴びることになるかずの方でしょう。だから俺がプレッシャーを感じるとしたら、それはメンバーとしてよりプロデューサーとして、ということになるんでしょうね。それこそどんなジャンルで、どんな曲で、どんな歌詞で、そしてどんなタイミングで——考えることは沢山あります。出来る限り、『SAKURAは常に新しいシーンを見せてくれるから飽きない』と言われたい。そういうグループでありたいというのがSAKURAのコンセプトですから——俺たちは事務所の『実験組』なので——そういう意味でのプレッシャーなら常にあります。それは、メジャーへ移るかどうかということには関わりなく、ずっとあります。メジャーデビューが叶うとしたら、記録より『驚いた』と言われたい。『驚いたけど、良かったよ』と言われたい。養成所を出て、実験組全権を任されて、自由を手に入れて——自由であるからこそ、実験組であることの意味を問い続けなくてはならなくて・・・それはきっと、この先、年月を重ねれば重ねるほど十字架になっていくのだろうと思いますが、今はまだ始まったばかり・・・

いや、まだ本格的には始まってもいなくて・・・だから、『脱アイドル』が重荷になる前に、『脱アイドル』というワードを楽しみたい。バッシングされてもいい——デビューが決まったら、今まで誰も想像しなかった**SAKURA**を提示したいですね。」

脱アイドル、というのは所属事務所セゾン・プロダクションが**SAKURA**に冠した売り込み文句だ。アイドル事務所として圧倒的な実績を誇るセゾン・プロの養成所で育ち、セゾンに所属している**SAKURA**。けれど**SAKURA**はアイドルではない。あくまでも、アイドルではなくミュージシャンとして、アイドル養成所で育てたアイドルの卵がどれだけのレベルまで到達できるか——実験ユニットとして**SAKURA**は存在する。

——意気込み十分、という感じですね。記録より記憶、ですか？

「記憶より意外性、ということにしておきます。自分にプレッシャーをかけるために。」

脱アイドル実験ユニットとは言うものの、目の前の高良氏は女性ならずともうっとりするような長身の美男子だ。あまりにも端正な顔立ちと、甘い声。相方の佐倉氏に至ってはまさにセゾン・アイドルの王道を行く中性的でキュートな顔立ち。歌って踊れることが既に証明されている彼等が、アイドルではないことにこだわる必要があるのだろうか。

——この実験に、勝算は？

そう尋ねると、高良氏はにやりと笑った。「ノーコメント」と言ってインタビューを終えた彼の表情は、静かな熱意と策略家の一面を覗かせていた。

佐倉さん、ダンス留学なんてしていたんですね。**SAKURA**はやっぱり、本格的なダンスもウリですからね。しかし、バッシングされてもいいだなんて、思い切ったこと言いますよ、王子は。そんなこと言うから本当にバッシングされてしまったんじゃないですか？そもそもデビュー前にこんなに「脱アイドル」について熱く語っているのに、デビュー曲がああのキラキラ・ポップって・・・計画、ちゃんと練ったんですかね？明らかにアイドルっぽいですよ、あの曲・・・良い曲ですけど。

## 『**SAKURA**咲く ついにメジャー始動した**SAKURA**を直撃』

ついにメジャーデビューが決まった**SAKURA**。佐倉クンと高良クンにどこよりも早くインタビューします！

——メジャーデビュー、オメデトウございます。

高良 有難うございます。

佐倉 どうもども！

——デビューシングルは、CMソングとしてお馴染みの『Jump』！もう、オンエア開始後からいきなり問い合わせが殺到したという話題の曲。イントロ、サビ、どれもキャッチーで、正直、インディーズ時代の曲からは別物って感じでしたけども・・・？

佐倉 元気で楽しいよね、この曲。なんだかちょっとお洒落さんだし、俺、好き。

高良 脱アイドルは前評判だけで、結局アイドル・ポップだなんてコメントも頂きましたが（笑）。

——コンポーザーとしては批評が気になる？

高良 コメントの意図はともかく、アイドル・ポップって、褒め言葉ですよ？アイドルが歌う曲を手掛けるのは、たいていその時代の最先端を走る音楽人でしょう？俺たちの曲がそういうレベルで受け止めて貰えているのなら、有難い話です。ポジティブに捉えさせて頂いていますよ。

佐倉 結局、キャッチーな曲を俺たちが歌えばアイドルっぽく見えちゃうって事でしょ？それってスゴくない？アイドルじゃなくてもアイドルに見えちゃうんだよ？だから、俺たちのファンになっちゃえば、二倍お買い得なんだよ。

高良 お買い得？

佐倉 だって、普通のポップのデュオのファンとしても楽しめるし、アイドルのファンとしても楽しめるんだよ？クーポン付いてる感じ？

高良 クーポンは、違うんじゃないか？

佐倉 オータなんてスゴイんだから。ピアノ弾きながら踊るんだから。

高良 踊らないぞ。

佐倉 踊るもん。踊れるもん、オータ。見たいよね？これぞ二倍二倍って感じ？見たい？そうでしょ？もー、あれやっちゃう？ツアー。

高良 まだ早い！

佐倉 えー。やりたいよお。イジワルだよ、オータって。そう思わない？

——どうでしょう（笑）。

佐倉 あー、みんなそうやってオータに味方するんだから！

——でも、高良くん、PVでは踊ってましたよね・・・？

高良 弾きながらではないですけどね（苦笑）。

——SAKURAはダンスヴォーカルグループっていう位置付けで・・・？

高良 いいと思います。曲を作るのは俺の仕事、それを魅せるのはかずの仕事ですから、正直、俺はグループの位置付けには興味がなくて。まあ、脱アイドルの看板はありますから、アイドルと見なされるのには抵抗がありますが、それ以外は別に。ただ、かずが一番光るのはそのスタイル（ダンスヴォーカルグループ）じゃないかと思っています。

佐倉 SAKURAってグループなの？え？二人じゃないの？誰か増えるの？俺クビ？

高良 大丈夫だから、少し黙ろう。

——（笑）。最後に、ファンの皆様一言。

高良 皆様のお蔭で、メジャーデビューが叶いました。この曲は、研修生の頃から応援して下さいっている方にも、インディーズ時代の音楽を聴いてSAKURAを好きになって下さった方にも、この曲を聴いて初めてSAKURAを知ったという方にも、同じように楽しんで聞いて頂ける曲に仕上がっていると思います。これから色々なSAKURAをお見せできるよう頑張っていきますので、応援お願いします。

佐倉 オータが作る曲って、なんかイイんだよね。皆同じ気持ちだと嬉しいな、って思う。応援してもらえるのってホントに嬉しいし、好きって言ってもらえるとこっちも皆のこと好きだよって叫んじゃいたい気分になるんだよね。養成所辞めてから全然皆の前に出てなかったのに、それでも待っててくれた子とか結構いて、感動した。皆こと大好き。これからいっぱいオータが曲作るから、俺と一緒に楽しみに待っててね！

高良 お前は「楽しみに待つ」側に立つなよ！「お届けしたい」側だろう！

佐倉 だってホントのことだもん。でも難しい曲はやだなあ。簡単なのにしてね？

高良 思いっきりタイミングの取りにくい曲にしてやる・・・

佐倉 ええー！

——コンビネーション抜群ですね。早くも次の曲を期待する声も上がっていますし、これから売れっ子の予感ですよ。今日はありがとうございました。

売れっ子の予感、的中ですね。五年経って、押しも押されもしないトップアーティストになりましたし、ややトップアイドル気味でもあります。二倍お得、はあながち間違ってます。この後ですよ、音楽番組で二人で歌って踊って・・・やっぱりアイドルじゃないかなんて叩かれて——王子に至っては殆ど歌ってないのにどうしてノコノコ表に出て来たんだなんて言われ方してましたし、**SAKURA**のスタイルが浸透するまでは王子も結構苦労しているんですよ。それでも、デビューシングルの売上としては歴代最高枚数を記録し、あと十年は破られることはないだろうなんて言われていますが——ちょっと懲りたのか、二曲目はグランドピアノなんかステージに置きちゃって、全く踊りませんでしたよね、王子・・・ひたすら弾いているという・・・確かに弾いていれば何で出て来たとは言われませんよ、バックダンサー扱いもされませんよ、しかし・・・ともなつて佐倉さんも踊らないという・・・実に動きのない寂しい画面構成でしたよ、あの曲のオンエア。新人賞を獲った名曲なのに！次の年なんて王子は出演しなくて、佐倉さんだけでテレビに出そうとして・・・結局佐倉さんが一人では嫌だってダダをこねて、それで極端に露出が少なくなったんですよ。ところがPVやライブ映像では二人してガッツリ踊っていて——その評価が世間的に高くなって行って・・・確かアメリカのダンス・パフォーマンスの大会でゲスト・アクトを務めたのもこの頃でしたよね・・・彼等が踊るムービーがなんと再生回数のデイリーランキング入りを三ヶ月連続でキープして——しかも全世界で！ですよ——それでテレビも慌てて王子のご機嫌をとりに出たんですよ。今でも「居ても居なくても」的なイジられ方しますが、今はスタイルが浸透しているし、愛のあるイジり方する人しかいません。デビュー当初はやっぱり、イヤミなツッコミとしてそういうセリフ言う人も多かったですから、王子もイヤだったんでしょう。だからって「じゃあ出ない」という選択には大人げないと感じますが・・・あ、当時まだ未成年か、王子は。学生だったはずだし・・・ん？まさか大学に行く時間を捻出するためにヘソを曲げた振りをしていたわけではないですよ・・・有りうる、あの黒王子なら有りうる・・・



## キス未遂事件

---

さて。本日も張り切って収録に臨みましょう。遠子さんは今日も楚々とした老女です。ゆっくりとした歩みを誘って、勝手知ったる楽屋へと向かいます。本日も夏川節が炸裂することを祈りつつ、遠子さんのために扉を開けて・・・

「あ、トコさん、ども～」

ものすごい勢いで口の端から煎餅の欠片をこぼしながら、大きく手を振っているのはオセロの白・・・もとい、SAKURAの佐倉さん。僕は思わず扉を閉めてしまいました。いや、そんなはずは・・・ネームプレートを二度見する。夏川遠子様。間違いなく遠子さんの楽屋です。おそるおそる扉を開けていくと・・・視界には矢張りオレンジの頭。

「どしたの？入らないの？」

・・・そもそも何で貴方が入っているんですか！

「あ、食べる？」

そういう問題ではありません！

「あら、いらっしやい。」

遠子さん、受け入れないでください！しかも、そんなあっさり！

「はあい！いらっしやってます！」

だから、可笑しいでしょう、なんで佐倉さんが自分の部屋のようにくつろいでいるんですか！保護者、保護者ドコ行った！

「食べる・・・？」

ちょっと未練がましく煎餅を見ながら、思いを切り捨てるように遠子さんに渡そうとする。なんて子供みたいな・・・なんてキュートな・・・じゃなくて！

「ありがとう。でも、結構よ。」

遠子さんが断ると、出ました、キラキラ・スマイル！ああ、近づけない。オーラが半端じゃない。なんて輝やきを放つ生き物なんでしょう。

「へへへ。」

はにかんで笑って、満足そうに煎餅を食べて・・・ああ、なんて幸せそうに食べるんでしょうね、この人は。可愛いなあ・・・じゃなくて！ああ、もう！ドコ行った、飼い主！

「どうかされましたか？」

どうかされましたよ、今困っているんですから、無駄にいい声で話しかけないでください！って、うん？いい声？——振り向いて見上げると、無駄にいい男。じゃなくて！居ました、保護者！

「いや、佐倉さんが・・・」

「・・・？ああ、また勝手に上がり込んで・・・申し訳ありません。」

「いえ、まあ、高良さんのせいではないんですが・・・」

潔いまでにあっさりと頭を下げる王子は、爽やかです。うちの看板にちょっかい出しさえしなけ

れば、本当に文句の付けようのない好青年です——まあ、オーラ黒いですけど。

「ご迷惑をおかけしています。」

遠子さんに静かに頭を下げる姿は、何とも親近感を掻き立てます。

「かず。」

「オータ！」

ぱっと笑顔の花が咲く。仲良いですね、この二人。ひたすら佐倉さんが王子に懐いているようにも見えますが。

「勝手にお邪魔するんじゃない。」

そうです、もっと言ってやって下さい。

「あら、構わないわよ。」

遠子さんの笑顔は優しく、柔らかくて、包容力に満ちています。流石大ベテラン。いやしかし、ダメです、甘やかしたら。

「そういう訳にはいきません。」

正解です、王子。まあ、僕からすれば一番失礼に土足で上がり込んできているのは高良さんの方ですけどね。

「ぶー、オータずるい。自分ばかりトコさんと仲良しなんて。俺だってトコさんと仲良しするんだもん。」

発想が幼稚園児です。ぶーって何ですか。幾つですか貴方は。あ、二十代半ばくらいでしたっけ？後半？

「応援団長はどうした。」

半ば呆れたように優しく笑う。高良さんって、こんな表情もするんですね。モモンガが部屋中に飛び交っているような時もあれば、冷静な知性派だったり、父性愛に満ちた穏やかなお兄さんだったり、色々な表情があって見飽きることがなくて——僕より年下のはずなのに、幾層にも重なった魅力で人を惹きつける。この重層性は、白王子の解りやすいキラキラしたアイドル性とはまた違って……この二人は本当にお互いを引き立て合うように結びついているんですね。光と影が、手を携えているような……うちの事務所に高良王子がいたら、僕なら役者さんとしてプロデュースしてみたいかな。音楽畑の方って独特のセンスがありますからね、役者さんとして大化けする方、いらっしゃるじゃないですか。その点、王子は器用だし、色男だし、あれだけ踊れるならアクションだっていけそうだし、「高良王子」でない誰かになれる可能性を無限大に秘めていて……ほら、今だって「王子」モードじゃない時があったりして——その点、天使の佐倉さんは年中無休のトップアイドルですから、アイドル以外は考えられませんよ、誰がプロデュースするとしても。今の、ヴォーカリストとしてだけ活動しようとする姿勢はあまりにも勿体無い！単に歌って踊れる、だけじゃない。佐倉さんはそれこそ、今活躍するアーティストの中でもトップクラスに歌って踊れるんですから！そしてあの、キラキラ・オーラ！あれは、天性の輝きです。アイドルとしてデビューする人は、男女問わずそれこそ毎年何十人と居ますよ、でも、誰もが目を奪われる輝きを放っているアイドルなんて、トップアイドル・グループにだってそのうち一人か二人、居るかどうですか。セゾンのアイドル達の中でも、セゾン・エリート



と呼ばれる特別な存在だけが放つオーラ。数人の現役エリート達の中でも、佐倉さんはずば抜けています。三拍子揃った本物アイドル。その存在を目にするだけで、気持ちが上を向く。落ち込んでいる人には安らぎと元気を、悩んでいる人には活力と勇気を、そして今まさに澆漑とした人には昂奮と感動を・・・アイドルの存在意義を地で行くあの白王子に、アイドル・デビューさせなかったセゾンの方針が僕には全く理解できません。いや、SAKURAは素晴らしい成功を取っていますよ、今のところは。でも、SAKURAがアイドル・デュオ「ではない」ことにこだわる意味があるとは正直思えません。黒王子が「ではない」のは分からなくはないですよ。けれど白王子は・・・

「どうか、されました？」

上から僕を覗き込むイケメンに、現実には引き戻されましたが。これ、心臓に悪いですよ。どれだけイケメンなんですか、そしてどれだけフェロモン無駄に撒き散らしているんですか。うっかり見蕩れるところでしたよ。いやあ、イケメンもここまで来ると男から見ても効くんですね、危険な王子だ、この人は。

「いえ、危うくどうかしそうでしたよ、王子の所為で。」

「俺の所為ですか？」

ちょっと意表をつかれたように、一瞬、切れ長の瞳を丸くしてから、すぐに目を細めて静かに微笑んだ高良王子は、何か僕の反応を楽しんでいるようにも見えて、年下のくせに余裕を感じさせます。

「い、いや、その、あの・・・」

ああ、しどろもどろ、僕！いやしかし、ここでタレントさんの気分を損ねるわけには・・・

ああっ、今、もしかしてニヤリとしました？しましたよね、黒王子？今、何か面白いことありました？ないですよ？

「王子くんもお上がりなさいな。」

鷹揚として、遠子さんが勿体なくもお声を掛けて下さっていますが・・・ダメですよ、悪魔の高良王子を懐に招き入れたりしては！

「有難うございます。」

ぼんのくぼに手をやって少し嬉しそうに俯いた王子は、喜んで上がり込むかと思いきや、ずっと手を下ろすと

「嬉しいな、貴女からお誘いを受けられるなんて。」

と綺麗に笑い、

「でも、そこの煎餅馬鹿を連れていかなくちやならないんですよ。番組HP用の写真を撮り直すそうなので・・・残念です。」

冷淡に見えるほどの無表情で断りを入れたのは意外でした。でも、一箇所だけ、口許に静かな艶やかさがあったのを僕が見逃すだけでも・・・？きっと、遠子さんだって見逃していませんよ。フェロモンガの奴め、なんていう隙間に生息しているんだか。

そういえば、HP、今は新メンバー紹介として大きな記事になっていますもんね。そろそろ通常のメンバー紹介欄に移さなくてははいけませんよね。

「かず。」

呼びかけて挑発的な指つきで白王子を促す姿は、シュツとしすぎていて何だか腹が立ちます。

「むうう。まだ食べたいのに！」

「もう十分食べたろ。」

「やだ！まだトコさんとお話してないもん！」

「わがまま言わなくてよ、佐倉ちゃん。またいらっしやいな。」

「むうう・・・トコさんがそういうなら行く。」

口を尖らせて、くりくりとした瞳で王子の様子を伺い、遠子さんにキュートな笑顔に向けて手を振って・・・ああ、心臓鷲掴みにされるほど可愛い。女性を見て可愛らしいと思う気持ちとはまた違うんですね。なんとというか、可愛らしい生き物を見て可愛らしいと思う気持ちと言うか。

「じゃ、またね、トコさん。」

語尾にハートが飛んでいそうなプリティ白王子が、僕の肩に手を置いて少し小悪魔な笑いを笑った。

「少し、地を出し始めたかもよ、オータ。」

「地、ですか？」

「前、番組で言われてたよ、オータ。オータはエースなんだって。」

「エース・・・ですか？」

この人はまた、唐突に何なんでしょう？高良王子には、野球とかやってるイメージ無かったですが・・・？

「だからね、好きだからって、容赦しないヒトなんだって。」

「は・・・？」

「怖いんだから、オータは。恐怖の大魔王なんだから。好きだからって、大切にばっかりしたりしないし、優しくばっかりしたりしないし、余裕無くしたりしないし、いつだってオータはオータなんだから。」

好きでも恐怖の大魔王・・・それって、エースじゃなくて、Sですか、もしや・・・？Sって、あのクール・ビューティーっぷりでSって、もはや女の子向け恋愛ゲームのキャラクターじゃないですか。「イケメン天才ミュージシャンの、素直じゃない優しさに胸キュン！」みたいな・・・僕もうキャッチコピーまで浮かんじやいましたよ。って・・・この場合、冷たくされるのは我らが遠子さんじゃありませんか！いけませんよ、いけません！やっぱり鬼門だ、あの無駄にシュツとしたモモンガめ！

「アオくん、入らないの？」

ああ、そんな優しい顔でいられるのは何も知らないからこそですよ、遠子さん！あんなキザな方法で近づいて、あんな美声で愛を囁いて、あんなイケメンぶりで誑かして、関心を惹いたら踵を返すなんて———なんですか、押してダメなら引いてみろ、ですか？だったらその作戦は失敗ですとも。言うほど押しきれてないですよ、うん。だから引いても無駄です。無駄ですとも。それとも天然？駆け引きのつもりはないのか・・・？天然駆け引き上手？

「入ります！」

この老女のナイトは、僕の仕事ですから！

高良王子から毎日の花は届き続けるものの、本体はめっきり姿を見せなくなりました。勿論、楽屋への挨拶を欠かすような人ではありません。挨拶に来ては無駄にメロメロン光線を発射して遠子さんを見ています。でも、ちっとも楽屋に居つかないんですよ。今までだったら無駄に遠子さんの周りをウロウロして、スキあらば誘惑しようというキラついた感じがあったんですが、最近ではモモンガを放つだけ放って、佐倉さんを残してサクッと帰ってしまいます。地を出し始めた佐倉さんは言っていたんですが、Sの人のやり口とは思えません。むしろ、ツンデレ……？ツンデレのツン部分というか……いや、それも違うな……あまりにも淡白というか……それとももう、うちの看板にちよっかい出すのを諦めたんでしょうか。

「御煎餅、御煎餅♪るるる御煎餅♪」

佐倉さんの意味不明な鼻歌にも慣れてきた自分がいます。このヒト、ほんとに自由な生き物ですね。

「随分気に入ったのね。」

目を細めて遠子さんが笑っています。ああ、なんて美しい祖母と孫の光景……じゃなくて！

「佐倉さんは、高良さんと戻らなくてもいいんですか？」

「ふあって……むごむ……」

「あの、飲み込まれてからでいいですから……」

高良さんがどう出ようと、佐倉さんは煎餅目当てでまだまだ夏川遠子の楽屋に入り浸るつもりなんでしょうが……高良王子、もう戦線離脱するんでしょうか。ちよっと一途で可愛らしい面があるんだな、なんて思っていた自分に腹が立ちます。そもそも王子の興味本位にうちの女優を巻き込むだけ巻き込んで、熱が冷めたら見向きもしないなんて、なんて非道な……！俺様王子様は勝手ですが、非道は王子たるものすることではないでしょうに。いや、王子は単なるあだ名だって分かってはいるんですが……

「だって。」

あ、飲み込んだんですね。

「楽屋戻ってもつまないもん。」

なんですと？そんな理由で他人の、しかも大御所の楽屋に居座る人がいますか！ああ、ここに居るのか……なんですかこの常識の無い生き物は。

「オータ今、ヨユー無いからカマッテもらえないもん。」

「高良さんに、余裕がない……？」

そんなことありますか？さっきだって颯爽と挨拶して淡白に帰って行きましたよ？

「そうね、最近、そんな感じね、あの子。」

人生の大先輩、夏川遠子があっさりとな得しています。いや、遠子さん、貴方は最近王子に対して評価基準が緩んできていますよ。危険です。もう今更靡いたりしたら貴方が傷つくだけです！

「そう、ですか？わかりやすく俺様だったと思いましたが・・・」

頭は下げている、威圧感あるというか。相手のことなんて二の次というか。俺様王子様高良様って呼ばれているのって、つまりはそういう事ですよね・・・？

「でも、やっぱりオータは、本気だね。」

「本気・・・？何にですか？」

「トコさん。」

ああ、口許に沢山煎餅クズがついています。いつもいつも、わかりやすく子供みたいな人だなあ・・・

「何をおっしゃっているんです？本気だったら、あんな挨拶で帰りますか？僕なら帰りませんよ。」

・・・って、あわあわわ！遠子さんに丸聞こえだった！しまった！違うんです、遠子さん。貴方に問題があるわけでは全くありません・・・！

「アオちゃんのごことはわかんないけど、オータは、どおでもいい相手にほど素を見せないよ。逆に、テンパってるとこ見せちゃうくらい、アオちゃんとトコさんがトクベツだってこと。」  
あの、サラッと流すところでしたが、何故僕が「アオちゃん」なんですか？「ちゃん」って何です？僕は貴方の友達ではありません！しかも年上だし！

「テンパって・・・ました？今日も相変わらず王子様でしたよ？」

あれのどこがテンパっているんですか？むしろ以前より冷淡にさえ見えましたよ。

「あれ、オータの中で曲づくりの追い込み入ってるんだよ。多分だけどね。いつもそうだから。頭の中で色々な音が鳴っていて、色々な言葉が回っていて、頭の外のことにまで気を回してられないんだって、前に言った。そゆ感覚、わかんないんだけど、オータはそゆこと嘘ついたりしないし、ホントだよ。」

曲作り・・・SAKURAの新曲が今、生まれようとしているんですか！？なんて瞬間に僕は立ち会っていたんでしょ！！・・・じゃなくて！

「でも、仕事はいつもどおりこなされていたと思いましたが。」

「だってオータだもん。プロだもん。プロ意識の塊魂だもん。」

塊魂ってなんでしょう・・・？

「オータは人に弱みを見せたりしないの。だから、仕事上の付き合いの人とか、オータにとってどうでもいい相手とかには、絶対にあんな顔みせないように気をつけてる。そのために神経使いすぎて胃に穴開いたことあるくらい。でも、この人になら自分を知ってもらいたいって相手には、ガード甘々ちゃんになっちゃう。オータが考えて選んでるんじゃないって、だって、オータの脳みそイッパイ作曲に持っていかれちゃってるから・・・もうね、オータの体が勝手に選んじゃうの、神経どこまで外に向けなきゃいけない相手か。」

んんん・・・ついていけないんですけど、要するにあれですよ、高良王子は作曲に没頭していて余裕がなく、別に遠子さんに愛想を尽かしたわけじゃないってことですよ。なんというか、ホッとしたというか、それはそれで相変わらず迷惑というか・・・

「渋い顔、しなくてよ、アオくん。甘えているのよ、要するに。」

「そーそー、そゆこと！」

にっこりと微笑みを交わす二人は、僕が荒んだ心の持ち主なんじゃないかと思わずにいられないほど癒やしオーラに満ちて王子を語っています。

「わかりづらい、甘え方ですね・・・」

「アオちゃんダメだよ、オータがイケメンだからって惚れたら！オータはトコさんしか見てないんだから。」

話がややこしくなるから黙ってください！

「わかりづらいかしら？私はやっと、あの子のあの子らしいところを見た気がするわ。いつもみたいに子供らしくないくらいスマートなのも、執事の王子の持ち味なんでしょうけれど、芸術家気質みたいなものを感じたことが無くて、本当にこんな子が作曲をするのかしらって思ったこともあったわ。作詞は、左脳だもの。あの子の賢さがあれば可能かもしれないよ・・・でも音楽は右脳でしょう？いつもの王子くんは感覚的なものを生み出すようには見えなくはなくて？」

「確かに、それは僕も感じていました。どう見てもエリート商社マンという感じで・・・ソツはなくとも面白みもないというか・・・人間というより、アンドロイドみたいで・・・あれでどうやってあんな多彩な音楽を作り出すのかと思っていましたが・・・」

「きっと、感覚的なものを抱え込んで外に出さないタイプなのね。理性的であることが自分であることだと思っている・・・でも、ああやって生み出す苦悩を抱えているところを見ると、あの子も芸術家なのね。人間らしくて、少し可愛いわね。」

人間らしい・・・？可愛い・・・？僕は遠子さんに何か言われる度にぼんのくぼを抑えている王子の方がよっぽど可愛いとこあると思いますが。って、ダメですよ！遠子さん、ダメです。可愛いだなんて、思っちゃダメです！情にホダサレている場合じゃありませんよ！

「だから遊ぼ！アオちゃん、あーそぼっ。」

ああ、輝きで目がヤラレそうだ。可愛い！って、ちがーう！この流れでなんだって「遊ぼ」なんですか・・・そもそも「遊ぼ」って、あなたはお幾つですか！

「んとね、オータの二個上。」

え？僕今、声に出してました？としても、答えになってくないですか？

「あ、そ、ぼ。」

「いやあの、佐倉さん・・・」

「ちゃん、がいー。」

「いえ、流石に佐倉ちゃんだなんて・・・」

「はい言った～。もう言っちゃった～。言えません、は無し～。」

・・・！かわいい・・・じゃなくて！もしかして・・・佐倉さんの方が余程Sなんじゃ・・・

「遊んでおあげなさいな。」

ああ、何故この自由な生き物にそんなにも優しいんですか、遠子さん・・・

「しかし、」

ああ、助けてください、遠子さん・・・

「私ならよくてよ。お手洗いにしようと思っていたの。メイクルームにも寄ってくるから、佐

倉ちゃん、楽しんでいらっしやって。」

「えー、トコさんも一緒がいいのに。」

ぷくう、と膨れています、今膨れたいのは僕の方です。

「しかし、遊ぶと言ってもですね・・・」

「あのね、前、ぷうさんに教えて貰ったんだ。叩いて被ってじゃんぽんけん！」

・・・誰です、ぷうさん・・・

「それは、じゃんけんぽんでは・・・？」

「ぽんけんじゃん！」

いや、もういいですよ、絶好調に楽しそうだから。

「じゃあ、それで・・・」

「うん！」

いや、馬鹿にしていたんですが、このゲームなかなかシビアですね。と、いうか、危険ですね。よくもまあ、こんな痛い思いをするゲームを大女優相手にやろうと思っていましたね、この人は

。

「あっ！」

また、突然に・・・

「どうされました？」

「トランプする！アオちゃん取ってきて！」

「トランプですか？」

「うん、楽屋にあるの。」

・・・そうでした、この人、自分一人じゃ**SAKURA**の楽屋にも行けないんです・・・って！遠子さん！そろそろメイクは終わる頃です、流石にお迎えに上がらなくては。

「夏川さんのお迎えにもいかななくてははいけませんし、流石に僕一人で**SAKURA**さんの楽屋には入れませんよ。」

「じゃ、一緒に行つてあげる。」

この場合、一緒に行つてあげているのは僕じゃないんでしょうか・・・？

メイクルームへ向かう途中で、**SAKURA**の楽屋へ立ち寄り、トランプをゲット。しかし、煮詰まっているはずの王子様の姿がありませんが・・・

って、何故僕のスーツを引っ張るんですか、このお星様は。

「あっち、あっち。」

自販機コーナーですか・・・ジュースでも欲しいんでしょうか、困った人です。

「こっそりだよっ。」

今度はどうしたんですか。そもそも貴方みたいにオーラ全開の人と一緒にいたらこっそりなんて到底無理です。

「しゃがんで。覗いて。」

物陰に隠れて、自販機コーナーを覗く。こっそりって言いますが、どう見ても怪しいでしょ、我々・・・大体、自販機コーナーに何があるんですか。あ、悩める王子様！壁に寄りかかって、天井を見つめながら握った紙コップを小指で軽く弾いて幽かにリズムを刻んでいる。本当だ——あれは相当、煮詰まっていますね・・・でも、何故だろう、小粋なスーツが少しヨレて、刑事ドラマのワンシーンのようなのは——いや、きっとイケメンだからなんでしょうが。若くて優秀なエリート刑事で知能派だけど、本当は暗い過去があって、叩き上げで武闘派の熱血刑事でかなり年上の部下とコンビを組んでいて——みたいな・・・視聴率取れるかな・・・？人物設定に意外性がなさすぎるかなあ・・・

あ、あれは我らが夏川遠子！ダメです、やっぱり迷っています・・・見てください、あの心細そうな瞳。メイクルームまでちゃんと行けたのに、何十年とこの局に通っているのに、何故楽屋に帰れないんでしょう。そういう困ったところ、キュートですよ、遠子さん。こっちです、と手を挙げようとして、口と手を押さえられました——

「ダメだよ、オータのチャンスかもしれないのに。」

「ふがっ。」

なんですとお！

あ、遠子さん、そっちは楽屋じゃなくて・・・

「あら、王子くん。」

「夏川さん。」

少し慌てたように身なりを糺す王子。確かにちょっと、今、可愛いつて思ってしまった・・・人間くさいというか、見慣れない一面というか。

「どうされました？かすが騒いでいて楽屋が煩わしいとか・・・？」

あ、今、僕の後ろで確実にぷくうと膨れています。

「そんなことなくてよ。あの子は可愛いわ。人懐こくて。そうじゃなくて、メイクの帰りなの。」

あ、膨れっ面がおさまったようです。

「ああ、喉でも・・・？何を飲まれますか？」

「そういう訳じゃないんだけど。」

そうですよね、迷子なだけですもんね、遠子さん・・・

「それは？」

「これですか？コーヒーですよ。頭が冴えるので。」

効果、あるといいですね。って、遠子さん！何しちやってるんですか！紙コップを握った王子の手の上からコップにそっと両手を添えて・・・そのまま、飲みましたよね、今、そのコーヒー・・・おそらく王子の飲みかけのコーヒーを。

「あら苦い。これで頭が冴えるの？」

至近距離で、イケメンを見上げて——こちらからは見えませんが、おそらく、微笑んだのでしよう。自由すぎる・・・流石若い頃は小悪魔と呼ばれた女優。その自由な行動が男に勘違いを起こさせてきたんですよ——結果いつも気の多い女だなんて疑われて何度も失恋してきたんです

よう、いい加減原因がその自由さだって気づきましょうよ。最も、これくらいの御年になると相手だって誰もそんな間違いはしないでしょうが・・・って、いかん！この相手は別です！止めに入らなければ・・・って、誰ですか、僕を羽交い締めをしているのは！相方か、あいつの相方か！

そっと、痩せた背中に手を回して。

そっと、唇を重ね・・・る、1センチ手前で王子の動きがピタリと止まる。

「すみません。」

優しく、肩に手を添えて。

優しく、身体を引き離す。

「コーヒー、ちゃんと飲みます。頭、冴えさせないと。」

額に手を当てた王子から、フェロモンがだだ漏れに漏れています。遠子さんの表情は、こちらからはよく見えません。完全無欠の王子様の弱みを握った気がして、少し得意な気持ちと、見てはいけないものを見てしまった罪悪感がまぜこぜになって僕に降って来ていて・・・複雑です。

「失礼なことを、しました。」

深々と頭を下げる姿が、

「申し訳ございません。」

・・・痛々しい。そして、その弱い姿にさえ、堪らないほどの色気が漂う。

「許して頂きたいとは、言いません・・・青井さんと呼んでできます。こちらで、このままお待ちください。」

細身の引き締まった体が、折れそうなほど脆く見える。って、まずい展開ですよ。僕を呼びに行くって・・・ここに居るのに！気まずい！どうしましょう！

「アオくんを？」

「ええ。楽屋へ、帰られるところなのでしょう？」

王子、遠子さんが迷子だと気づいていたんですね。流石佐倉さんと長年一緒なだけはある。

「貴方は送ってはくれないの？」

出た、天然発言。今の高良王子にそれはかなりキツイんじゃないか・・・

「お送りしたいのは、山々ですが。コーヒーの効きが、悪いようなので。」

ぽつりぽつりと言葉を切って話す王子の姿からは、真摯さと後悔が滲み出ています。この人は、きっと、悪い人じゃないんでしょうね・・・本当は。うちの夏川遠子に手を出そうとしたことは、絶対に許せませんが。

「貴女にこれ以上、ご迷惑をおかけしたくない。勝手だとは、分かっているんですが。」

むしろ勝手だったのは遠子さんのような気もしますが、この際、このエロエロモモンガには猛反省して頂きましょう！

「私に、迷惑をかけるの？」

出た、天然の追い打ち！

「かけてしまうかもしれない、そう申し上げたんです。」

言って聞かせるように、王子が力なく笑った。何故でしょう、今、僕、使命の壁を超えてモモン



が王子を応援したい気分さえなっています。いけません、しっかりしろ、僕！

「あら、貴方が私にかけられる迷惑だなんて、たかが知れているのではなくて？」  
大御所の余裕なんでしょうが、遠子さん、それはなんというか、逆効果というか・・・むしろ相手を煽っているだけでは・・・？そういうところが下手だからオールドミスなんですよ、昔は綺麗だったのに！いや、今でも年齢を考えればお綺麗ですが。

「敵わないなあ。」

王子の呟きに感情移入してしまいそうで、思い切り頭を振る。気確かには、僕！僕は遠子さんを守るのが仕事だろう！天敵を憐れに思ってどうする！

「それでも今日は、そうさせてください。貴女にこれ以上失望されたら、俺が辛いんです。」  
煽られたと分かっている、しかも遠さんがその気もなく煽ったと気づいてくれる・・・その気がないと分かっているから、遠さんを大切にして思いやってくれる。貴重な存在です、王子。貴方が佐倉さんと同じように孫の立ち位置で居てくれたなら、こんなに心強いことはないのに、何故貴方は天敵なんですか。

「辛いのか？」

そこ、食いつきますか、普通・・・

「ええ。」

よくもこれだけ耐えているものです。もし僕が、年頃の女性にこのくだりをやられていたら、正直、精神的に耐えられる自信はありません。男として、かなり頑張っていますね、王子。

「どうして？私、王子くんに失望したなんて、言ってなくてよ？」

ちょっと待った！遠子さん！それはどういう・・・まさか、嫌じゃなかったとでも、言うつもりですか？あのまま唇を奪われても良かったと？ダメです！それだけは！相手は**SAKURA**ですよ！若手スターのスクランダルを貴方がつとめるなんてこと、あってはならない！貴方はうちの看板なんです！いまだに貴方の実績は燦然と輝いていて、トオコマニアと呼ばれる往年のファンがうちの事務所に落としてくれるのは、お金だけじゃないんです。夏川遠子の看板があるから、今や各界の重鎮となった、かつてのファンたちがうちの若手にもチャンスを呉れるんです。遠さんの後輩のために、遠さんの事務所のためにと行って。

「そうですね。でも、俺は、貴女に失望されるだけのことをした。」

そうですとも、言ってやってください。って、何で今僕、高良王子に頷いてしまったんでしよう・・・

「もう、貴女への了解なしに先走ったことはしないと、以前誓いました。それなのに、貴女が俺の思いを受け入れてくださったわけでもないのに、あと1センチで誓いを破るところだった。いや、もう、気持ちでは破っていたんです。」

はいその通り！ご理解いただけましたよね、遠子さん？

「許しは乞わないと、言ったわね。」

そうです、そこにつながるんです、遠子さん！ビバ夏川遠子！

「乞う資格も、無いと思いました。」

しかし、色男だな、この王子・・・なんというか、天敵でなくなったと思うと良さがしみじみ分

かりますね。

「それで、納得しているの？満足しているの？」

また過酷な質問を・・・

「意地悪な人だ。」

あ、遠子さん・・・地雷踏んだんじゃ・・・

「納得しようと、しているんです。満足出来ているわけ、ないじゃないですか。」

ごもつともです。申し訳ない、うちの遠子さん、探究心旺盛なのはいいんですが、ちょっと時と場合を考えないことが多くて・・・

「王子くんは、そうやって抱え込んでいくのね。若さが勿体無いわ。」

だから、ダメですって！若気の至りなんて煽っちゃいけません！

「何もかも、抱え込んでいくわけじゃありません。音楽は好き勝手にやっています。大学ももう出ましたから、スケジュールも割と自由になってきました。どちらかという、存分に自由にやっていますよ、同年代の一般的な若者たちに比べれば。思い通りにならないのは、貴女との関係だけだ。俺が満足することはきつとないんです。貴女に対する欲は増えていくばかりで、果てが見えない。貴女が好きです。でも貴女が大切だ。俺は自分を過信していました。気持ちくらい、制御できると。そうじゃなかった。俺はきつと、この先も曲作りが佳境にさしかかる度に貴女との誓いを破る。貴女を傷つける自分に、俺は耐えられない。だから、この想いだけは、抱え込むべきだと・・・そう、今、自分に言い聞かせています。俺の満足なんて、問題じゃないんですよ。」

ああ、これが小僧と老女じゃなければ恋愛ドラマのワンシーンですよ。って、なんて不謹慎なんだ、僕。

「私に対する、欲・・・面白いわね、王子様。」

どどどどど、どうしました、遠子さん・・・正気ですか。今、王子の一世一代の失恋宣言が出たところですよ。せっかくモモンガがウロチョロしなくなるのに、何引き止めるようなこと言っているんですか！

「面白くは、ないでしょう。俺だって、男ですよ。」

知っています。今、目の前にモモンガの大群が飛び交っています。向こう岸が見えないくらいの大群です。貴方は恐らく、世の男共が泣いて羨ましがるくらいオトコです。

「そうね、さっき、良く分かったわ。」

あ、あの失礼事件ですか？

「貴方、無意識だったでしょう？」

いやいや、無意識であんな素早い抱擁がありますか！どんだけ手慣れているんですか・・・いや、手慣れていそうですね、王子・・・いくらずっと遠さんが好きだったからって、あのメロメロン光線を持っていて女性経験が少ないなんて有り得ない・・・

「驚いたの。あんな目を見たのは、何十年ぶりかしら。」

王子の手が、ぼんのくぼへ伸びる。そりゃ小っ恥ずかしいですよ。どんな目だったか、見てなくても、ええ、分かる気がします。

「今まで貴方が色々なことを言ってくれたけれど、私はね、ずっと貴方が私をからかっているんだと思っていたわ。そうでなければ、ファンとして私を好きだという気持ちが強すぎて、私自身を好きだと勘違いしているのかもしれないって。」

いや、そうですよ、絶対そうです、間違いありません、遠子さん。

「貴方、ずっと本気だったのね。」

「勿論です。」

「今まで、貴方に悪いことをしてしまっていたわ。貴方の、あの目・・・あの目を見て初めて、分かったの。貴方が本気だと。」

待ってください、遠子さん！そんなはずがない！

「謝るのは、私の方ね。貴方の気持ちときちんと向き合っただけでいかなかったわ。」

「止めてください。夏川さんは何も悪くない。」

勿論です、うちの女優が悪いわけがない。高良王子の独り相撲にうちの看板を巻き込まないで下さい。

「でも、不思議なの。」

・・・遠子さん・・・？

「貴方が本気だと知って、嫌だという気はしないの。」

とーおーこーさーん！戻ってきてください！そっちは危険地帯です！

「何故かしら。」

教えて差し上げます、遠子さん。それは、気の迷ってヤツです。だから、戻ってください。僕たちのところへ、戻ってきてください。

「嬉しいこと、言っていますね。」

王子が、笑った。垂れ流されるフェロモンと、透き通った清潔感が絶妙なバランスで拮抗している——これぞ黒王子。これが「色気の高良」と言われる男の本性。男の僕でさえ、背筋が痺れた感覚がするわけで——老女の夏川遠子にどれだけのパンチ力があつたのか量りかねますが・・・

「貴女はどうしてそんなに可愛らしいんです？」

喉に力を入れる余裕さえないのか、わざとなのか・・・王子が、甘い声を次々に放つ。あの腕に抱きしめられたい、なんて僕でさえ一瞬気を迷わされる強烈なフェロモン体質に、遠子さんがクラッと行ってしまっていないことを祈るばかりです。

「まあ。またそんなことを言うの？お婆さんに？失礼な子ね。」

って、言いながら、遠子さんの声は少し楽しそうにさえ聞こえるのですが・・・？

「何度でも、そんなことを言いますよ。子供の目をしていたように、見えましたか？」

王子がにやりと、口角を上げたのが見えて、くらりとしそうになりました。背中がクスクスと笑いを囁み殺している気配がするのはきっと気のせいじゃないでしょう。

「どうされました？」

と小声で訊くと、囁きが

「オータ、あんなに今まで気を付けてたのに、結局あんな声で、あんな目で、あんな笑い方なん

だもん。最初っから地で行けば良かったのにねえ？」

と答え・・・佐倉さん、もしや楽しんでいませんか？

「あら、言うじゃない。」

遠子さんが、

「最後ですから。」

クモの巣に

「最後なの？」

ゆっくりと

「貴女次第で。」

墜ちた。

「じゃ、おあいこね。」

じゃ、じゃありません、遠子さん。ダメです！

「おあいこ、ですか？」

高良王子の糸は、

「そうでしょ？王子くんは私に失礼なことをして・・・私は貴方に可哀想なことをしていたわ。」

キラキラと夜露に濡れて

「許して・・・いただけるのですか？」

魅惑的に輝いている。

「私も、許して欲しいもの。」

夏川遠子は、

「許す？」

絡め取られた蝶だ。

「俺が？」

老いた体を感じさせない、美しい蝶だ。

「・・・じゃあ、」

王子の唇が不敵に歪み、

「おあいこ、ですね。」

艶やかな瞳で遠子さんを射抜く。

「矢張り貴女は、俺のミューズだ。」

ぼんのくぼを軽く抑えてから何かを断ち切るようにさっと手を下ろし、微笑んだ高良王子は、誰にも文句のつけようのない「王子様」で、何故か動悸が速くなります。

「では。」

王子がそっと、エスコートするように手を上げる。

「御送り致します。」

良かったですね、王子！丸く納まって・・・って、ちがーう！何ですか、これ！あんなに超弩級に失礼なことやらかしといて、何もなかったことにしようなんて甘いですよ！遠子さん、優し過

ぎます！というか、遠子さんは何も悪くないのになんだってそんなに後ろめたさを感じちゃっているんですか！ダメです！ダメです！遠子さん・・・って、誰です、僕を引っ張るのは！

「アオちゃん・・・こっち来ちゃう！」

！

「良い趣味を、お持ちですね、青井さん。」

艶やかさの中にドスの効いた声が降ってきて、反射的に顔を上げる。

「たたたた・・・」

「高良、です。二度と、忘れられない名前にして差し上げましょうか？」

「けけけ・・・結構です・・・。」

「おい、そこ！」

高良王子の目が、通路の奥へ向く。視線を追いかけると――

「逃げられると思っているのか、かず。」

自分だけ逃げようなんてズルイですよ、佐倉さん！最も、見つかつちゃっていますが・・・

「てへ。」

誤魔化して、笑って・・・可愛い。なんていう破壊力のある茶目っ気・・・

「かず。」

・・・あ、まさかのノーダメージ・・・

「後で、な。」

胆が冷えるとはこのことです。違う意味で、破壊力抜群です・・・

「夏川さん、参りましょう。」

コロリと変わる表情は、やはりいい役者になれそうですが・・・今やそんな悠長なことを考えている場合ではありません。

「あ、あの・・・」

「アオくん、こんなところでどうしたの？」

「い、いや、その・・・」

しどろもどろになる僕の耳元で、甘い囁き。

「一日、俺に頂けますか？それで、手を打ちましょう。」

甘いのに、有無を言わさない強さがあって、逆らうことなどできそうもありません。

「え、あの、僕は・・・」

「あなたの一日本なんて何の魅力もない。俺の欲しいもの、分かりますよね？」

「夏川さんとデートさせろっておっしゃるんですか・・・？」

僕がビクビクしながら顔色を窺うと、色男は遠子さんの方を向いて嘘くさいまでに優しく笑って親指で僕を指し・・・

「悪いこと、してたみたいですよ。」

ひいいいい！なんてこと言うんですか！

「悪いこと？」

「たたたたた・・・」

「高良、ですよ。本当に忘れられなくして差し上げたほうがいいかな。」

何故だろう、ものすごく紳士的に僕の隣に居るだけなのに、ものすごく怖い……

「悪いことって何？アオくん。」

僕は思わず、高良王子を引き寄せ、

「いつにしましょう？」

と口走ってしまいました。最低です、僕。ちっとも遠子さんを守れていません……でも、僕だって自分が可愛いんです、申し訳ないけど、今後事務所の上の方から叱られるかもしれない可能性が生まれようとも、今王子の威圧感から逃れられ、かつ遠子さんに嫌われないで済むのなら、遠子さんのスケジュールくらい売ります！ええ、売りますよ！むしろ、売って悪いかって開き直っちゃいますよ、僕は。

「夏川さん。」

ああっ、出た、悩殺の営業スマイル！

「参りましょう。野暮なことを追求なさるのは夏川さんらしくない。」

あのう、高良さん、野暮なことやっていた僕や佐倉さんへのあてつけですか、それは。

「あら、そういうことなの？」

今、何に納得されたんですか、遠子さん……なんだかちょっと怖いですが、もしかして、僕、なんとなくですけど、助かりました……？

「さあ。」

絵になるなあ、王子は。流石は執事の王子……夏川遠子節、実はいいところについていたのかもかもしれません。が、そんなことを考えたのも束の間——遠子さんを先へ促してから王子が振り返りざまに言ったセリフに、僕は早くも自分の選択を後悔しました。

「来週の木曜、如何ですか？」

遠子さんのスケジュールは勿論ガラガラです。

「……一日オフです。」

ああ、僕、とんでもないことをやらかしてしまったんじゃ……！